
HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN !

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！

【Nコード】

N5896A

【作者名】

cocconeko

【あらすじ】

若干八歳の耳年増少女と、無駄に年を食っているけど見た目青年の、凸凹コンビがおくる、はちゃめちや探し物道中記。数々の障害苦難海賊王を乗り越えて、二人は無事に探し物まで辿り着けるのか？！

銃と少女と聖剣と+海賊と?!

「どうしたらこういう状況になるのかしらね?」

金色の、ふわふわの髪をゆらし、両の腕を組んだまま、少女は足元の青年を見下ろした。

「ううう、ごめんなさい」

ずれた眼鏡はそのままに、青年は背中を丸め、うずくまったまま頭をかばうポーズを条件反射的に取って、少女に見下ろされながら謝った。

ちゃんと立てば、二人の身長差は頭三つ分ほどもあるというのに、どうやらこの二人の立場は身長とは関係がないらしい。

「あんた、年いくつだっけ?」

「・・・えつと?」

「じゃあ、あたしはいくつ?」

「やつつ?」

少女は額に青筋をたて、げしげしと青年の背中を蹴りつけた。

「あんた見た目どう見ても二十歳とつくに超えてるわよ!」

「あいたたたた!やめてようっ」

どうやら、年齢差も関係がないらしかった。

「ちよつと買物に出かけたはずなのに、戻って来ないから探しに来てみれば、何をどうしたらこうなるの?!」

「・・・不注意?」

「がつん!

「げふう!」

少女は、今度は青年の背中を踏みつけた。

「お嬢ちゃんよ、俺らを見視しないでほしいんだがな?」

無骨な髭面の男が、二人の会話に割って入る。

「あら、ごめんなさい。でも、あんたたちの欲しいようなもの、悪いけど持っていないのよ」

振り返った少女の先には、数人のガラの悪そうな男たちが、にやにやと下卑た笑いを顔に張り付けていた。

ここは港町。

大きくもなく、小さくもない、よって物資はそこそこあるが、警備もそこそこ。こういった港には、時々海賊なんてものが立ち寄ることがある。

二人は今、そんな海賊にからまれている最中なのであった。

「そうかい？じゃあしょうがねえな。その眼鏡とお嬢ちゃん、二人に来てもらうか。あんたら二人、いい値で売れそうだ」

髭の男がそう言っていると、残りの海賊達が一斉にゲラゲラと笑い出す。暇つぶしに連れて行って、最後には奴隷商人にでも売ってしまおうということだ。

「・・・そういう物騒なことを言われてハイ、ソウデスカなんてついていくわけがないでしょ！セイン！あれ！」

「えー？キヤルあれ出すの？この人たち一般人だし気が引けるんだけど」

「ごいん！」

変な音が青年の頭から発せられた。

少女に殴られたためだが、彼女は構わず二発目の拳を作る。

「こいつらのどこが一般人なのかしら？」

「分かりました！ごめんなさい！」

涙目になりながら青年は立ち上がり、両の手を合わせる。

彼が、その合わせた手の平を、ゆっくりと離していくと、手と手の間の空間から何かが生まれ始めた。

まず姿を見せた柄を青年の左手に握られ、右手の平から、赤ん坊が生まれるかのように、彼のものであるう赤い液体でぬめ光る、鋭く長い刃が引きずり出されてゆく。

やがて、青年の血と体液を滴らせ、ずるりとその身を露わにした。ずぶずぶと、生々しく発生したそれを、少女はためらいもなく掴

み取り、その長く煌く刃身を海賊達に向けた。

それは一振りの剣だ。

「何だ？今のは」

人の中から抜き身の剣が生まれる異様な光景に、男たちは呆然とした。

「あたしたちに目を付けたのが運のつきと思うことね」

少女は不敵に笑う。

「手品か？どうやったかは知らねえが、その大刀、お嬢ちゃんには重いんじゃないかい？」

男が少女に掴みかかるうとした、その瞬間だった。

シュリン……！！

軽やかな音色と共に、少女の姿が視界から消えた。

「うわあああ！」

後ろから聞こえた仲間の悲鳴に、男が振り返ると、信じられないことが起こっていた。

ベルトを切られてズボンを押さえる者、頭部のでっぺんにハゲを作られた者や、腕に巻いていたバンダナを半分にされた者と、一人がみな一様に、どこかしら切られている。肝心の自分は、いつのまにやら小刀を下げていたホルダーベルトをすっぱりと切られていた。

まさに電光石火。

十にも満たない少女の仕業とは思えない。

慌てて振り返れば、少女たちはもう遠くに逃げていくところだった。

「一体、何者だ……」

男は不本意ながら、キヤルと呼ばれていた少女の言ったとおり、あの二人に目を付けた不運を認め、後を追おうとはしなかった。

「キヤ、キヤル、もう大丈夫だよ」

「あ、そう？じゃあ、歩きますか」

息を切らせているセインとは対象に、キヤルはけろりとしている。
「若いつていいなあ」

しみじみと呟くセインに、キヤルは歩調を合わせた。

「あんたはもう年寄りだもんね。多少は労わつてあげるわ。でもね、何であんなのに絡まれているのよ」

「年寄りつて、うう、傷つくなあ」

わざとらしく胸を押さえる青年を、少女はすっぱりと無視をする。

「あたしがなくなつて何とかできたんじゃないの？」

「だって、僕が手を出すわけにはいかないじゃないか」

「・・・あたしならいいわけ？」

「う。ごめんなさい」

歩きながら、どちらが年上なのかわからないような会話を、二人は延々続けている。

「ほんと、セインなんか、引っこ抜くんじゃなかった」

「それはないよキヤル」

セインと出会ってから、すっかり口癖になつてしまったそれを、キヤルはまた口にした。

聖剣・大賢者セインロズド

三ヶ月ほど前、封印されたこの伝説の剣が、何者かによつて数百年ぶりに解かれた。

そのうわさは、まことしやかに囁かれ、あまり広がりを見せてはいない。

それもそのはず。

その当人たちが、実はコレである。

眼鏡をかけた、背の高い、おっとりした青年が、長い歴史の間、自身を封印し続けていた聖剣、セインロズドの正体であり、また、その封印を解いて、彼を永い眠りから目覚めさせたのが、この金髪の勝気そうな少女、キヤロットであった。

「岩に突き刺さってたあんたを引き抜いてからというものの、ろくなことがないわ。聖なる剣っていうんなら、何かこう、奇跡とか何か起こせないの？」

「む、無理デス・・・」

「・・・分かってるわよ。まじめに答えないでよ馬鹿バカしい」

二人の会話は宿に着いてからも続いていた。

「この宿も明日には出るんだから、しっかりしてよね」

「うん。ごめんなさい」

素直に謝るセインに溜め息をつきつつ、キアルは宿屋の部屋の扉を開けた。

小さな宿屋である。簡素で安くて、しかし食事はそこそこ美味しかった。

ここを離れるのは何となく惜しかったが、目的のためには仕方がない。

「次はどこへ行くの？」

「そうね。船で海を渡って、ここに行こうと思うの」

キアルは、セインが買ってきた新しい地図を、歩きながら広げ、ばさりとテーブルの上に置いて、一点を指で示した。

「エルグランド島？」

「うん。名前が似てるでしょ？それに、本で読んだんだけど、ここってちょっとした伝説があるのよね」

キアルの声は心なしに弾んでいる。

「伝説？どんな？」

セインは地図を覗き込みながら、カチャカチャとお茶の用意を始めた。

「えっと、ね、この辺りの町や村には独特の風習があつてね？亡くなった人をこの島に奉るの。そうすると、死者の魂は約束された地へ赴ける」

「ええ？それってお墓って事だよね？やだなあ」

「他にもあるわよ？ここでは昔から超常現象が見られるの」

「超常現象？」

いかにも胡散臭いというように、眉尻を下げるセインに、キヤルはかまわず、明日出掛けるための準備を着々と進めてゆく。

「そ。天に昇る階段を見たとか、海の向こうへ列を成して飛び交う光を見たとか。何にせよ、何か手があるかもしれないじゃない？ せっかく近くに来てるんだから、行ってみてもいいと思うわ」

「じゃあ、明日は船を捜すの？」

はい、お茶、と言って、手元にカップを置くセインを、キヤルはガバツと見上げた。

「そーよ！ 船！ すっかり忘れてたけど、さっきのあいっすら海賊じゃない！」

「そうだね、いかにも海賊だったよねー」
「ばきん！」

セインは右の脛を抱えて涙眼にうずくまった。

「海賊つて言ったら港に停泊しているに決まってるでしょ！ 明日鉢合わせでもしたらどうするのよ！」

「そんなに怒らなくても」

見上げるセインを、キロリと睨む。

「左の脛も蹴られたい？」

「・・・イイエ」

ますます小さくなってしまったセインを、キヤルは再び見下ろして、彼の用意したお茶を啜った。

「・・・セインって、お茶を淹れるのは上手よね」

思わずカップの中を覗き込む。

ふんわりとした良い香りに鼻を刺激され、口に含めばなんとも言えないお茶の葉の、混じり気のないやわらかな味が広がる。

「明日早く出ることにするわ。今日はご飯食べたらさっさと寝るわよ」

早起きの漁師の船にでも乗せてもらって、海賊に見つからないように、こっそり船出するしかない。

二人はそう決めると、早めの食事を摂ろうと、また部屋を出て行った。

そして夜。

といつても、まだ宵の口。

セインのもそもそと動く気配に、キヤルが目覚めます。

「何やってんの？」

目を擦りながら、声を掛けてみる。

「あ、ごめんキヤル。起こしちゃった？」

カーテンを少しだけ開けて、明かりも灯さずに窓辺に立つセインに、キヤルは何となく事態を把握する。

「・・・何かあった？」

「うん、昼間の海賊さんたちがね」

二人とも、声を潜めた。

ちよいちよい、と、セインが外を示す。

キヤルはセインの側に、静かに歩み寄った。

「うわ、いるわね」

そつと、窓の外を覗いて、キヤルはうんざりしたような声を出す。部屋の向かい側の木の下、宿屋の外壁の隅、その壁に面した細い通路。

見えるだけでも結構な数だ。

「・・・逃げよっか？」

「そうね。宿泊費は机の上にも置いとけばいいわよね」

早々に話がまとまると、二人とも素早く準備を完了させる。

「キヤル、着替えた？」

「一番に着替えたわよ！」

パジャマのままに逃げるわけがない。

顔を真っ赤にしたキヤルだったが、セインは意に介さなかったらしい。

「じゃあ、行こっか。荷物、離さないでね？」

につこり微笑んで、セインはキヤルを、彼女の大きなカバンごと抱え込んだ。

「ちょ、セイン、ここ二階！」

キヤルが悲鳴を上げる暇も無く、セインは彼女を抱え込んだまま、音もなく窓から飛び降りた。

「大丈夫？」

「い、いいから、行くわよ」

バクバクする心臓を、キヤルはどうかこうにか押さえる努力をする。

時々セインがとる大胆な行動に、キヤルは面食らうことがしばしばある。

普段がふだんなだけに、予測がつかなくて困る。

「いつもこんな風ならいいのに」

「え？何？」

「何でもない！見つからないうちに行くわよ！」

二人は宿屋の壁から離れて、目の前の茂み伝いに移動を始めた。カシャン！

頭上から、何かが割れる小さな音が聞こえた。きつと、海賊どもが、先ほどもで二人がいた 部屋へ侵入したのだろう。

「何気に危機一髪だったのかしら」

「みたいだね。どうする？このまま港に出ちゃう？」

「そうね。それがいいわね」

ヒソヒソと話しながら、四つん這いになって進んでいる時だった。ボキッ！

盛大な音があたりに響き渡った。

ざあっと血の気を引かせて二人が振り向いた先。

セインの足元には、真つ二つに折れ曲がった木の枝が。

「この、大馬鹿者！」

「うわあん、ごめんよお！」

そうつと辺りをうかがってみる。

二人に気付いた気配もなく、しんとしたままだ。
安堵に胸をなでおろす。

「おい、物音が聞こえたが・・・」

急にすぐ横から声をかけられ、二人は飛び跳ねた。

セインに至っては、声をかけてきた海賊と、バツチリ目が合って
しまった。

「いたぞ！」

「わわわっ！」

一目散に駆け出したが、時は既に遅し。あちらこちらから人影が
溢れてくるのが、夜目にも分かる。

「っ、このまま港まで突っ切るわよ！」

一難去って？

まさか海賊たちだって、自分たちの船のある港に逃げ込むとは思わないだろう。それに、港町というものは大概入り組んでいる。うまくすれば、どこかで彼らを撒いてしまえるかもしれない。

「港に着いたらどうするの？」

「小さな漁船でもボートでも、とにかく何でもいいわ！借りるなり乗せてもらうなり、ついでだから闇夜に紛れてエルグランド島へ向かうわ！」

「わかった！」

二人は走った。

とにかく走った。

時にはくねくねと曲がる路地を行き、右に曲がり、左に曲がる。気が付けば、海賊たちの怒号も罵声も、聞こえなくなっていた。

「ま、撒いたかな？」

「さあね。分からないわ。でもとにかく、何とか港には着けたみたいね」

ぜいぜいと、息を整えながら、二人は港にある倉庫街の一角で、身を潜めて、港の様子を窺った。

ざっと見ただけではすべてを把握しきれないが、昼間に来たときの記憶と照らし合わせれば、だいたいどこに何があるのかは心得ていた。

彼らから見て右の沖合に、巨大な帆船が、黒い水面に、更に黒い影を落としている。

「あれが海賊船よね。よかった。島とは反対のほうだわ」

「エルグランド島って、あっちの？」

海賊船とは対極に、左側に月の光を浴びて、ほの青く、海に浮かぶ小さな丘のような島が見えた。

「好都合だわ。こちらから回って、小さなボートか何か、探しまし

よ
」

そう言つて、キヤルが倉庫の壁に挟まれた細い路地へ向かった時だった。

「きゃあああああ！」

「キ、キヤル！」

ばさばさと、大きな網の中に捕まつて、キヤルが空中に吊り上げられたのだ。

「何よこれ魚臭い生臭い！」

「・・・キヤル？」

そんな状況でも手足をバタバタさせて、まったく危機感のない様子に、セインは眼鏡をずり落とした。

「臭くつてすまねえなあ、お嬢ちゃん。何せ俺らが漁をするときに使う網なもんで」

倉庫の屋根から、男が顔を出した。

「あ、あんた昼間の！」

見覚えのある顔に、キヤルは目を吊り上げた。

間違はなく、セインに絡んでいた髭面の男だった。

「お嬢ちゃんくらい頭が回るガキなら、仲間を振り切るくらい、わけがないだろうと思つてね」

男の眼に、昼間は見ることが出来なかった危険な光が宿る。

「おっと、動くなよ？お嬢ちゃんが心配なら船まで来るこつたな。

俺たちの目的はあんただ。眼鏡の兄ちゃん」

手を合わせようとしたセインに、男はそう告げると、怒鳴り続けるキヤルを引き上げて軽々と担ぎ、さっさと屋根の向こうに消えてしまった。

「くそっ」

セインは踵を返し、キヤルが落としたカバンを拾い上げると、海賊船へ向けて走り出した。

「・・・ちよつと。女の子にこの扱いは何よ？」

担がれっぱなしであちこちが痛いのに、やっと降ろされたと思ったら、それでも綱にかけられっぱなしで、キヤルは先程から機嫌が悪かった。

ぐるりと目線をめぐらせれば、窓からはすぐに海が見える。板張りの室内には、ごろごろと雑多なものが置かれていた。

何の部屋かといえば、余ったからいらないものを置いている部屋、という表現が一番合いそうだ。

「迂闊だわ。私としたことが、あんなへボいオヤジに連れ去られるなんて」

おまけに残してきたセインはいろいろな意味で軟弱で、正直心配だ。

「アレで何百年も生きているっていうんだから、きつと生きすぎてボケちゃったのよ」

ぼそりと、セインに八つ当たりしてみる。

初めて彼に出会ったとき、何の変哲もない古びた剣が、ボロボロのまま岩に突き刺さっているのを、かわいそうだと思った。

岩の周りはきらびやかな聖堂の壁で囲われて、聖堂の周りには、かの剣を引き抜かんと、頭の悪そうな豪傑ばかりが集まって。

剣はボロボロのまま、静かに、ただそこにあって。

一体どれ程の時を、この岩に刺さったまま、剣はここにあったのか。

なぜ封印などされて。

対の筈の鞘もなく、抜き身のまま。

聖堂の外の力自慢どもは、こんなことを考える自分のことなど、きつと笑い飛ばすだけだろう。

ただの少女趣味だと。

子供の戯言と。

そうして誰も、この剣自身のことなど、考えもしないのだ。

かわいそう

そう思つて、何も考えずにただ伸ばした自分の指先が触れた瞬間。

気の遠くなるような時間、そこにただ、あつただけの剣が。

今打ち出されたばかりのような、眩い刀身となつて。

キヤルの手に握られていた。

「それがあんな大ボケだつたなんて」

「誰だい？その大ボケつてのは」

ぬうつと、部屋に入ってきたのは、自分を連れ去つたあの男とは別の男だつた。

「ノックもしないの？しつけがなっていないわね」

キヤルは男のつま先から頭のとっぺんまでを、じとりと観察した。他の海賊たちが腰に挿している短剣と違い、装飾が少々過剰な長剣を下げている。

彫が深くて男らしく精悍で、日と潮に焼かれた肌は浅黒く、健康的で若々しくさえある。

どこかの誰かさんとは、ずいぶんな違いだ。

「小さいとはいえ、レディに失礼だったかな？」

「だったら、この状態をなんとかしてもらえない？」

「これは、申し訳ない」

明らかに、今までのムサイ海賊たちとは違う男の様子に、賢い彼女の頭は、大体の見当が付いた。

「貴方が船長？」

網を外す手際の良い男の手先を見ながら、キヤルは考え込んだ。
どこかで見たことがあるような。

「！よく分かったな。俺がこの船の持ち主だ」
心なしか、男の顔は嬉しそうだ。

「貴方、私の連れが目的だそうだけど」

「ああ。お嬢さんを使っておびき寄せてみようかと思ってね」
まるで漁でもしているような言い草に、キヤルはムツとする。

「無駄よ。私なんかエサにしたって。こう見えて、会ってまだたったの三ヶ月よ？肉親ならともかく、赤の他人だもの」
虚勢を張ってみる。

だが、それはあっさりとかわされてしまった。

「三ヶ月も一緒に赤の他人と旅を？そのほうがよっぽどだと思うがね」

最後に彼女の髪にからまっていた網をほどいて、男はにやりと笑った。

「あんたの連れ。聖剣だろ。大賢者・セイクロズド？」
キヤルは驚いて、大きな眼を更に見開いた。

「ビンゴだ」

その様子に、男はくつくつと笑った。

また一難

「何でそう思うの？」

今までセインに剣を出させても、あんな取り出し方をするものだから、手品師くらいには思われても、彼が聖剣であると気が付いた者などいなかった。

大賢者・セイクロズドが引き抜かれた噂は耳にすれど、彼の正体を見破られたことなどなかったのだ。

「こんな、私みたいな子供が、聖剣を引き抜けるとでも？」

「聖なる剣なんだろう？ だったら、大人だけが引き抜けるとは限らない」

キヤルは血の気が引いていくのを感じた。

セインがああ聖剣だと知れてしまったら、大変なことになる。

彼が封印されていた聖堂の周りに集まっていた、頭の悪そうな大人たち。

私利私欲に目がくらんだ権力者や、力を欲する馬鹿者どもが、よってたかつて彼を我が物にしようとするだろう。

そうなったらセインはどうなる？

自分は？

キヤルはゾツとした。

「あいつが聖剣？ 変な特技はあるけど、れっきとした人にしか、私には見えないわ。それとも剣が人に化けるとでも？」

「大賢者・セイクロズド。どれ程の業物であろうが、単なる剣に賢者の称号が何故与えられたのか。それを考えたら、剣の正体が人間だって不思議じゃねえ。案外、頭の切れる凄い剣の使い手に、そんな二つ名がついただけなのかもしれないしな」

おどけてそんなことを言ってみせ、次の瞬間にはにやりと笑う。

「それでも・・・世の中結構摩訶不思議なモンなんだぜ？」

今まで見てきた大人たちとは違う。

キヤルの本能が警戒信号を発していた。

だが、男はお構い無しに、キヤルの頭をわしわしと撫でる。

「海賊なんてものやってるからな。いろんなモンを見てきたのさ。おかげで御伽噺までガラにもなく信じてしまえる」

「・・・じゃあ、エルグランド島は？何か見た？」

キヤルは身を乗り出させた。この男は色々な意味で警戒の必要がありそうだが、御伽噺まで信じられるというのなら、何か手掛かりに繋がる情報を持っているかもしれない。

「何だ？あの島に用なのか？」

キヤルの勢いに、男は気圧される。

「そうよ！伝説が残るあの島で、何か見た？！」

「残念だな。俺もここにはあんまり来ないんでな」

「そう・・・」

がつくりと、キヤルは肩を落とした。

「何だ、傷つくな」

顔を覗きこまれたが、キヤルはフイと、そっぽを向いて見せた。

「別にいいわよ、貴方が傷ついたって私には関係がないもの」

「そりゃあ、まあそうだ」

男は冷たいキヤルのその反応に、肩を小さくしてみせた。

「・・・あの島、何かあるのか？」

「さあ？楽園に続く道だか扉だかがあるっていう伝説があるだけよ」

「その割にはご熱心だな？」

「だから何？私が何にご執心だろうと、あんたに関係の無いことだわ」

男との会話に、キヤルは段々腹が立つてきた。

先程から床の上に座りっぱなしで足が冷たくなってきているのも原因かもしれない。

相手も床に座りっぱなしとはいえ、最初からニヤニヤと、どこか嬉しそうなところがシャクに触る。

今の状況を、楽しんでいるのだ。この男は。

「キャプテン！例のヤツが来ましたぜ！」

「またもやノックもなしに、今度は頭の禿げた、初めて見る顔がドアから出てきた。」

「レディの前だ。ノックくらいしろ」

「あ、はい！すいやせん！」

禿げた男はドアを開けたまま、再び甲板の方へ出て行った。

「さあ、ナイトのお出ました」

そう言っただけで立ち上がると、いよいよ楽しそうに、男は部屋から出て行ってしまった。

残されたキャルは、男の最後の台詞に、先ほどまでの不機嫌も忘れて、笑い出しそうだった。

「ナイトって、セインのことよね？ナイト？あいつがナイト？似合わないすぎ！」

そんな風に自分が笑われているとは露知らず、セインは海賊船の甲板上で、複数の男たちと対峙していた。

海賊王

「キヤルを返してくれないか？」

高々に叫ぶと、男たちの間から、ひと際目立つ容貌の、背の高い男が現れた。

「あんたがあのお嬢さんの連れかい？」

「・・・貴方は？」

「俺はこの船の持ち主だが？」

睨み付けるセインをもっともせず、男は自身の足元、すなわち船を親指で示す。

「そうですね。僕はセイン。キヤルを返してくださいませんか？」

あくまで少女の安全を確保したいのだろう。鋭い視線は用心深く少女の姿を探している。

「俺が気になっているのはあんただ。あんたの出方次第だな」

「出方とは？」

セインは一歩半だけ、左足を下げて身を引いた。

いつでも動けるようにするためだ。

「セインとか言ったな？ 噂の聖剣を、俺に引き渡してほしいんだが」

「交換条件ですか」

「そういうことだな」

セインは眼鏡のずれを直す。

きらりと眼光が鋭くなつたのを、男は見逃さなかった。

「あんたが来てくれなきゃ、あのお嬢さんはサメの餌にでもするが？」

すう、と、セインの眼光が、さらに危険なものへと変わる。

「・・・僕を怒らせないほうがいい」

その言葉に、海賊たちは一斉に笑い声をあげた。

眼鏡をかけた、色白で、背は高いが線の細いセインが、自分たちをどうこうできるなどとは思えない。

セインは手の平を向かい合わせ、間に空間を作る。

その小さな隙間から、ずぶずぶと、始めは柄が。次第につばが出現し、最後に刀身が、彼の血と体液を滴らせ、ぬらぬらとした妖光を放ちながら、セインの手に握られた。

ざわめく海賊たちの中で、自称船の持ち主だという男だけが、ピュウツと口笛を吹いた。

ぱつと、セインの姿が消えた。

「ぎゃ！」

彼が立っていたすぐ右側から悲鳴が上がる。

キン！

続いて、先ほど悲鳴を上げた、倒れこむ海賊の前方から、短剣が弾け飛んで、高い金属音を響かせた。

「野郎！」

気付いた一人がセインに切りかかるが、あえなくかわされ、代わりに柄で頭部を殴られて気絶する。

立て続けに二人がかりで右と上部から切りつけるが、セインは長身をひらりと舞い上がらせると、剣を軸に体を回転させて一人を蹴り飛ばし、着地ざまにもう一人の短剣を器用に剣先で弾き飛ばして、勢いのまま肘鉄を腹に食らわせた。

次々と倒れ始めた仲間に、海賊たちは殺気立った。

「お嬢さんが剣の使い手だとは聞いていたが、まさか剣自身が凄腕だとはね」

楽しそうに、船の持ち主は呟く。

「そこまで！」

響き渡った一喝に、全員が声の主を振り返った。

「キャル！無事だったんだね？！」

そこにいたのは、小さな手足を踏ん張らせて立っている、ふわふわの金髪の少女だった。

セインは周りの海賊たちを押し退けて駆け寄ると、キャルをぎゅっと抱きしめた。

ボカ！

「あ痛！」

セインに抱えられたまま、ちょうど彼の頭に手が届くのをいいことに、キヤルは思い切りセインの頭を殴った。

「あたしを一人にするなんて！」

ぽかぽかと、小さな拳で何度も殴られて、セインの眼鏡はどんどんずれていく。

「ごめんよキヤル、だからこうして来たじゃないか」

「遅いのよ！」

「小船を探すのに手間取っちゃって、甲板によじ登るのも大変だったんだ」

セインはキヤルの小さな頭や頬を、何度も撫でる。

「もう、本当に来てくれないかもって思ってたんだから！」

「ごめん、ごめんってばキヤル」

ぐしぐしと、涙を溜めて、今にも泣き出しそうな少女を、一生懸命なだめる青年に、海賊たちはあっけに取られた。

「は！はははははは！」

大きな、まさに爆笑といった笑い声に、一同は振り返った。

「キヤ、キャプテン？」

「は！こりゃあまいった！」

さも面白いと言わんばかりの、自分たちの船長に、海賊たちも戸惑い気味だ。

「気に入った！」

「は？」

男はびしつと二人を指差した。

「キヤルだっけ？お嬢さん、エルグラント島に連れて行ってやろうじゃないか」

「は！？」

船長の発言に、海賊たちは顎が外れそうな勢いで、ぽかんと口を開けた。

「俺様は海賊王ギャンガルド。ちったあ、知れた名だが？」

男は自分の胸元と、船上にはためく船旗とを、交互に示した。キヤルはあわてて男の顔と、旗とを、何度も確かめる。

「あー！」

今度は大声を上げて、キヤルが男を指差した。

旗に描かれるは黄金のマーメイド。

三叉の槍を携え、王冠を手にした、海の女王。

この旗を持ち、大帆船クイーン・フウェイル号を駆る、海賊王の異名を持つキャプテン・ギャンガルドといえば、泣く子も黙る海賊の中の海賊だ。

しかし、キヤルの口から出た呼び名は違っていた。

「賞金首一千万ゴールド！」

「え？ そうなの？」

海賊といえば大概は国境を関係なく走り回る上に、それなりに海の治安も管理してくれるので、取締りなどの対象にはなれど、賞金首にされてしまうようなことはないのだが。

力を持ちすぎて、各国から迷惑がられて賞金をかけられてしまった。

ギャンガルドは、そういう唯一の海賊だ。

「キャロット・ガルム。またの名をゴールドエンブライローズ。

黄金の血薔薇といわれる賞金稼ぎが、まさかこんな子供とはね」

ギャンガルドはにやりと笑った。

「悪かったわね。みんな絶世の美女とか思っらしいけど、こんなお子様でがっかりしたでしょ」

キヤルの肯定に、海賊たちは開いた口を更に開けた。

「ええええ！？ こんなチビがですかい？」

あの、禿げた海賊がキヤルを指差した。

「あなどるなよ？ お嬢さんの剣技をここで披露してもらっつか？ おま

えなんかあつさり真つ二つだ」

ゴールドエンブラッディローズ。

その名に海賊たちはキヤルとセインから距離をとった。

「さすがね。貴方の部下だけあるわ。ガラは悪くても、頭は回るのね」

セインの剣が届く距離ではないが、懐にはすぐに潜り込める。そんな距離だ。

「さつきも言つたが、俺はお前さんらが気に入った。こいつらは気にするな。癖だ」

さらにとそんなことを言われても、にわかには信じがたい。

「・・・物騒な癖ね。気に入ったって、私が賞金稼ぎである以上、貴方の首を狙うとか、そうは思わない？」

「この船の上でか？不可能だよ。俺の首を取って、それから？海の上でどうする？それに、俺の部下しかいない船上で、できるのかい？危険なのはあんたたちのほうだと思うがな」

いくら有名な賞金稼ぎと聖剣とはいえ、この船の屈強な男達を前に、それは不可能だろうと思われた。

「そうになったら、ここにいる全員蹴倒しても陸に帰らせてもらうわ。それくらいの自信はあるわよ？」

海賊王の意に反して、不敵に微笑むキヤルに、ギャンガルドはまた、面白そうにくつくつと笑った。

「やっぱり気に入った！どうだ？俺の船に乗っておかないか？ここで戦うのもいいが、どうせならタダで島に行ったほうがいいだろう？」

その申し出に、キヤルは少し首を傾げて考えた。

その仕草はどう見ても八歳の少女でしかなく、とても賞金稼ぎには見えない。

お金なら、まだあるから、当分は大丈夫。ここで海賊を押し付け

て小船か何か奪うにしても、場所もよく分からない上に、面倒くさい。

しかも小船で行くより大きな船のほうが快適だ。

おまけにあの海賊王の船だ。

見物するのも観光気分で楽しいかもしれない。

「決めた！ついてく！」

なんとなく、そう返事をするだろうと予測していたセインは、あきらめ気味の笑顔をつくった。

「キヤル。彼らは僕が目当てだったって忘れてるでしょ？」

そのセインに、海賊王は答えた。

「喉から手が出るほど欲しいことは変わらないが、さっきのあんたら見てからじゃ、諦めるよりないな。五百年もの封印が解かれた理由ってのは、是非聞いてみたいがね」

「簡単さ。キヤルが僕を起こした。それだけだよ」

微笑むセインに、ギャンガードはにやりと笑った。

「さあ、話はまとまった！野郎ども！この二人は俺たちの客人だ！粗相のねえようにしやがれ！」

「おおー！」

意気のいい声が、あちらこちらから一斉に上がった。

月光

それからは大変だった。

一気に盛り上がった船上は、船出の忙しさに嵐のようで、セインなどは有無を言わず駆り出され、ロープ張りやら帆布を下ろしたりするのを手伝った。

ひと段落すると、今度は無事に出航できた祝いで、甲板はお祭り騒ぎとなる。

酒樽がいくつも運び出され、コックが腕を振るった自慢の料理が、テーブルから床の上から、所狭しと並ぶ。

柱と柱の間にはランプが吊り下げられ、巨大なイカ釣り漁船のようだ。

セインもキヤルも、その騒ぎに呆気にとられて、ただぼかんと海賊たちを見ていた。

「・・・凄いわね」

「うん。僕も何度か船には乗ったけど、ここまでお祭り好きなのは始めてかな」

なんとなく隅によつて、並べられた料理をなんとなくつまんでいると、あちらこちらから、同じ言葉が聞こえてくる。

「グレート！」

「わあ！」

その言葉が真横から発され、セインはびくりと肩を縮めた。

「な、何？」

キヤルはキヤルで、セインにしがみ付いている。

「おりゃあ、タカつていうんだ。お嬢ちゃんに挨拶したくつてさあよく見れば、酔っ払ったあの禿げ頭だった。

「主賓がこんなところにいちやあ駄目じゃねえか。向こうへ来いや」そう言つて、ぐいぐいと二人を引っばつて、気が付けば甲板の真ん中に連れてこられていた。

そうになると、二人の周りにどんどん人だかりが出来てゆく。

まあ飲め、といってグラスを手渡され、なみなみと酒を注がれると、禿げ頭のタカが、高々と自分のグラスを持ち上げ、余った左手で、セインのグラスを持った腕を、わっしと掴んで持ち上げて、また言った。

「グレート！」

すると一斉に、周りの男たちも、グラスを高々と上げた。

「グレート！」

圧倒されてわけが分からないといった表情のキャルに、セインが笑いかける。

「大丈夫？」

「え、ええ。っていうか、グレートって何？乾杯みたいなんだけど」「うん、乾杯とたいして変わらないかな？古代語なんだけど。感謝するっていう意味なんだ。まさかまだ船乗りの間で使っているとは思わなかった。伝統的なものになっているんだろうね」

「へえ・・・」

何百年も生きているだけに、セインは物知りだ。

余分なマメ知識も多いことは多いが、まだ八年しか生きていない自分には、その長い年月を、想像することさえ難しい。

こんな風に、彼が生きてきた長い時間を思わせる発言をされると、余計にそれが感じられた。

しかしすぐに、あれを食え、これを飲めと、次々と皿から瓶から差し出され、おかげであまり考える余裕がなくなった。

「よお、お嬢ちゃん。あん時はすまなかったなあ」

ぬうつと、二人の前に顔を出した髭面の男の腹に、キャルはいきなり、有無を言わず拳をお見舞いした。

「お、おじょう、ちゃん、そりゃ、ないんじゃ・・・」

腹を押さえて男はうずくまる。

周りの海賊たちは大歓声だ。

「この連中の中で、あんたが一番私にとって不屈き者だからよ」

港の街中で、先頭を切ってセインに絡んでいたのも、おそらくセインのことをギャンガルドに報告したのも、そして何より、臭かった魚の網にキヤルを詰め込んだのも、この男だ。

騒ぎの発端はすべてこの男にあるといっても過言ではないだろう。「すまなかつたよ。俺はラゾワつてんだ。一応この船の風読みを任されてる。よろしくな」

にしし、と笑って差し出された手を、キヤルはうさん臭そうに見つめた。

「風読みがこんな所に居てもいいの？」

「お、おう！今は順風でな。しばらくは大丈夫だ」

セインが聞くと、出した手を握ってももらえないでいたラゾワは、助かったとばかりにセインを見上げた。

そこで。

「・・・兄ちゃん、でけえな」

しみじみと、セインの頭のでっぺんを見つめた。

ラゾワも、どちらかというと背が高い部類に入るのだが、それでもやはり、セインのほうが高い。

「いくつぐれえだ？」

ラゾワの質問に、セインは腕を組んで考えてみるが、思い出せないらしい。

「さあ？もうずいぶん昔に測ったままだから、覚えていないな」

その長身から、初対面で見ただけで、小さなキヤルに蹴りつけられていた姿は、中々に違和感があるかもしれない。なかった。

「お嬢ちゃんのほうは、こうして見てみると、なかなか別嬪じゃねえか。やっぱり俺の目に狂いはないね！将来はそこの男が振り向かずにはいられないような美人になるだろうな」

「・・・そういえば、私たちを売り飛ばすとか言ってたわね」

髭の顎に手を添えて、キヤルの顔をまじまじと観察する男に、キヤルは嫌味臭く、わざと言った。

「ははは！ありゃあハク付けの嘘さ。人身売買なんぞ、うちのキヤ

プテンが許さねえよ」

ようやく口を利いてくれたキヤルに、ラゾワは笑った。
もともと、悪い男ではないのだ。

ガラが悪いだけで。

「あの時は、何で僕に声をかけたの？僕、金目のものとか、持っているように見えないと思うのだけど」

そういえば、と、思い出したようにセインが尋ねた。

「あ、う、いや、あれはだな、金目のものが欲しいとか、そういうんじゃないくて」

急に歯切れの悪くなったラゾワに、セインもキヤルも首を傾げた。事情を知っているのだろう、一部の海賊たちは野次を飛ばしたり、口笛を吹いたりしてラゾワをからかっている。

「だから、つまり、その」

「つまりその？」

「細身の別嬪が歩いてんな」と・・・

「・・・・・・・・・・」

顔を真っ赤にして答えるラゾワに、セインもキヤルも目が点になった。

「ええ！？それってつまり僕を女の子と勘違いしたってこと？」

こつくりと、申し訳なさそうに頷くラゾワに、セインは耳まで赤くし、海賊たちとキヤルは、堪えきれなくて笑い出す。

呼んでみたら男だったから、引っ込みが付かなくなって、とりあえず金をせびってみたらしい。

「僕ってそんなに女顔かなあ」

「ああ！いやほら！遠目だったし斜めから見たし！」

落ち込んでゆくセインに、ラゾワがあわてて言い訳をする。

「キヤル、君笑いすぎ」

「ご、ごめ、だって、くくくつ、お腹イタ、た、助け、くぶぶつ」

たしかに線が細くて整った顔立ちのセインだが、女性に間違えられるとは。

「悪かったよ、あん時は」

「いいですよ、もう。悶着もありましたが、結果的にはキヤルも無事でしたし、こうして島に連れて行ってくださっているわけですから」

そう言つて、笑つてくれたセインに、ラゾワは何度も詫びた。

酒盛りもひと段落ついたところで、キヤルは船の手すりに寄りかかつて、空にぽっかりと浮かぶ月を眺めていた。

「どうしたの？」

自分の着ていた上着を、小さな肩にかけて、セインはキヤルのふわふわの金髪を撫でた。

そつと見上げてくる瞳は、吸い込まれそうなほど大きい。

「月」

キヤルはそう言つて、海を指差した。

真っ黒な海原に、きらきらと波頭に穏やかな光を映し、月が姿を崩してそこにあった。

空の月と海の月。

波が船板を優しく叩く音だけが聞こえる。

「きれいだね」

ぽつりと、呟いた。

「そ？」

「うん」

キヤルの髪の色みたいだ。

セインはキヤルの横顔を見下ろした。

先程自分を見上げた瞳は、今はもう水面に浮かぶ月を映している。少女の小さな手に握られて、封印から覚めたのはほんの数ヶ月前

だというのに、もう随分長く一緒にいるような気がする。

何百年も生きて来て、何千、何万という人々と出会っては別れていくというのに、この感覚は不思議で仕方がない。

五百年前、生きることしか出来ない体で、死のうと自身を封印した。

あの絶望の中で、二度と再び、この目を開くことはないだろうと思っていた。

それなのに。

深い眠りの中で聞こえた声は、あまりにも優しくて。

「セインはかわいそうだから、あたしが争いのない国へ連れて行ってあげる」

セインの実情を知った後、彼女は泣きそうに笑いながら、無邪気に言った。

「早く見つかるといいわね」

月を見ながら、キヤルが言った。

「・・・うん。そうだね」

争いのない国などあるはずもないのだと、セインは承知の上で、キヤルと旅に出た。

貧富の差もなく、飢える事もなく、争いもない。

伝説の楽園、エルドラドを目指して。

幼なすぎる提案は、賢い彼女らしからぬものではあったが、それでもキヤルらしいと言えばキヤルらしかった。

セインはセイン

「朝にはエルグランド島に到着するらしいよ?」

「そんなにかかるの? すぐ間近に見えるのに、案外遠いのね」

月光に照らし出された島は、出航してからあまり大きさが変わっていないように思える。

「風が凪いでしまったから。少しかかるそうだよ? ラゾワが言っていた」

「船つて、大きくてもやつぱり風がないと駄目なのね」

キヤルはあくびを噛み殺すと、ぐいつと背伸びをした。

「じゃあ、眠ることにするわ」

目を擦る仕草が、年相応でかわいらしい。

「さつき、部屋を用意してもらったから、案内するよ。君のカバンも置いてあるんだ」

明日になったら、島へ降りて、何でもいいからキヤルが喜ぶことがあればいい。

伝説の島だというなら、きれいな光景なんかが見られれば。

たとえば今日の月のような。

そうして少し、エルドラドに近づけるならそれもいい。

セインはそんなことを思いながら、船底へ続く階段を、うとうとし始めたキヤルを抱えて降りていった。

「キヤル、島に着いたよ?」

翌朝、キヤルはセインに起こされた。

まだ全然眠り足りなくて、まぶたが痛かったが、寝ているわけにもいかなかったので無理やり身体を起こした。

「今日はいい天気だよ。と、いつても、お日様も昇りきっていない

から、断言できないけどね」

セインが言ったとおり、甲板に上がってみると、上り始めた太陽が、水平線から光を散らして空を染めていた。

「・・・朝焼けなんて、久しぶりに見たわ。たまにはいいものね」

目を擦りながら、キヤルは昇り始めたばかりの太陽を見つめた。その太陽とは逆のほうに目を向けると、船を固定させるための碇を投げ込む音や、ガラガラと小船を下ろす 音やらが、あちこちから聞こえる。

帆は既に畳まれていて、頭上に括り付けられていた。

昨夜あれだけ騒いでおいて、その手際のよさに、キヤルは感心した。

「よお、早いじゃねえか」

「タカ。おはよう。これから仕事？」

声をかけてきた禿げ頭に、セインが気安く返事をした。

「ダンナに手伝ってもらって、昨夜のうちに下作りはしておいたかな。おかげで楽だったぜ。お礼に旨いもん食わせてやるから、楽しみにしててくれよ」

いつの間にやら、セインと打ち解けていたらしい禿げ頭に、キヤルははっとした。

「・・・ちよつとまって」

「何？」

「今の会話からすると、あのタカっていうのが、この船の料理人ってこと？」

キヤルが眉間に皺を作る。

「うん。料理長だって。昨夜の料理、美味しかったよね」

嬉しそくに頷くセインに、キヤルは予想していてもやっぱり驚いた。

人は見かけによらないというが、まさにそれだ。

「あの歯抜けの禿げ頭が、料理長・・・」

ひよろりとして、格好といい体型といい、どう見ても下っ端にし

が見えないタ力だ。

そんな男から、昨日の料理が出てきたとは思えない。

見た目もきれいで、内容も凝ったものが多く、手間隙かけて作られていることがわかるうえに、正直に美味しかった。

「朝食も楽しみだね」

ほくほくと、セインはうれしそうだ。

「・・・そうね。って、え？ご飯食べていくつもり？」

意外だ、というようなキアルを、セインは訝しげに見やる。

「だって、楽しみにしてるって言っていたんだから、僕らの分も作ってくれているんだよ？食べなきゃ失礼じゃないか」

「そりゃあ、そうだけど、だってもう島に着いているのに、時間がもったいないわ」

「だめ！」

急に、声を荒げたセインに驚いて、彼の顔を見上げた。

珍しく、真剣な面持ちだ。

「な、何よ」

「キアルは育ち盛りなんだから、ご飯をきちんと食べなきゃ！」

ずい、と、顔を近づけて言い聞かされる。

「分かったわよ、そんなに怒らなくてもいいじゃない！」

キアルは、セインのこんな顔は、あまり見たことがない。

驚きと戸惑いで、つい拗ねてしまった。

そんな子供っぽい自分が、時々嫌になる。

「・・・ごめん」

素直に謝るキアルの頭を、セインは優しく撫でた。

「僕もきつく言い過ぎた。ご飯食べたら、船長にお世話になったお礼をしに行こう？」

「うん」

時々、気が早って今回のように食事を後回しにしようしたり、やらなきゃならないことをせずにいたりすると、こうして怒られている気がする。

あまり無いことなので気が付かなかったけれど。叱ってくれる人がいるのは、なんだかくすぐったい気持ちになる。

「俺に挨拶なんざいらねえよ？恥ずかしくなっちゃう」

ぬうつと現れたギャンガルドに、セインは眼差しを冷ややかにした。

「ずっと聞いてましたよね？嫌な人だ」

「え？そうなの？」

気付いていなかったキヤルは、先ほどの自分も見られたのかと、ぼつと顔が赤くなった。

「さすがだな。いや、すまねえ。やつぱりあんたたち二人は見ていて空きねえなあと思ってな」

すつと、キヤルを下がらせたセインに、ギャンガルドは片手をあげて制止した。

「おいおい、勘違いしないでくれよ。飯を食いに全員を呼びに来たら、あんたらの声がたまたま聞こえただけさ。セインロズドはどうに諦めてるぜ？」

「なら、いいんですが」

まだ目を逸らそうとしないセインに、ギャンガルドは溜め息をついてみせる。

「たとえここでキヤルちゃんとお前さんとを引き離せたとして、そのあと、どう考えてもあんたが俺の言うことを聞くようには思えないのだがね？」

「それもそうですね。よくお分かりで」

につこりと微笑んで、ようやく自分から視線を外したセインに、ギャンガルドは肌があわ立つのを感じた。

「未恐ろしいよまったく」

各国の首領から恐れられ、荒くれ者の海賊たちをまとめ、海原を駆け巡り、海賊王とまで言われる自分が、これほど恐怖を覚えるとは。

「普段の間抜けな眼鏡の兄ちゃんと、どっちが本当のあんたなんだ

い？」

その質問には、セインではなくキヤルが答えた。

「何言ってるの？セインはセインだわ」

「・・・そりゃ、そうだ」

大賢者・セインロズドをして、ただの人、と言ってしまうこの少女は、間違いようもなく、封印から彼の剣を引き抜いたのだと、あまりにも簡単なキヤルの答えに、海賊王は納得した。

「おっと、いけねえ。タカの奴に怒鳴られちまう。さ、飯だ飯！悪いが通りすがりに他の奴らにも飯が出来たって、教えてやってくれ」
そう言つと、側にあつたロープを器用にするすると、登つていつてしまった。

「食堂つて、どこだったっけ？」

昨夜は甲板の上で食事を済ませていたので、食堂の場所を知らないことに気がついた。

誰かに聞こうと、きよろきよろしながら歩き始めたときだった。

ジャンジャンジャン！

大きなドラの音があたりに響き渡り、次に。

「オラ朝飯だ！朝飯！」

そのドラよりも大きなギャンガルドの声が響き渡った。

「あたしたちが伝えてあげなくても十分だわね」

呆れかえったキヤルの声に、セインは笑った。

エルグラン島（１）

他の海賊たちと食堂へ向かうと、大皿に料理が盛り付けられていて、おいしそうな匂いを漂わせていた。

好きなものを自分で小皿にとって食べることが出来るので、キアルはそれが面白いと喜んだ。

「おいしい！」

うれしそうに食べるキアルに、タカに頼んで弁当を包んでもらおうとセインは考えていた。

迷惑かもしれないが、彼なら喜んで作ってくれるだろう。

そこへタイミングよく、タカ本人が、なにやら大皿を持って現れた。

「どうだい、俺の料理は？」

「すごくおいしい！」

「そうかいそうかい、へへへ」

キアルの様子に、嬉しそうにタカは笑った。

「で、俺からのプレゼントだ」

そう言って、持ってきた大皿を、キアルの前にドン、と置いた。

そしておもむろに、伏せていた巨大な蓋を開ける。

「きゃあ！」

「おお！」

キアルは飛び上がらんばかりに手を組んで、回りの男たちは驚きの声を上げた。

「タカ、これ・・・」

「スゲエだろ？」

セインはタカとキアルの嬉しそうな顔に、目の前の白くて大きくて丸い、華やかな食べ物を見た。

まるでウェディングケーキのようだ、とは思ったが、口には出さなかった。

「作るの、大変だっただろう?」

「なに、皆に手伝わせたさ」

三段重ねのケーキには、天辺に巨大な、ピンク色のクリームで作られた薔薇が大輪の花を咲かせ、その周りには白いクリームで作られた薔薇やり ボンが飾り付けられ、食べてしまうのがもったいないほどだ。

「朝からなんだとは思ったけどよ、朝飯食っちゃったら行っちゃうんだろ?」

ほれ、と言って、包みを二つ、さらに手渡される。

「弁当だ。昼にでも食ってくれよ」

「ここまでしてもらうなんて悪いよ」

作ってもらうつもりだった弁当だが、こんなもてなしまでしてもらった上では申し訳がない。

タカはそんなセインに、パチリとウインクをしてみせた。

「へへ、世にも珍しいものを見せてもらったしな。聖剣に芋の皮剥きまでさせちまった海賊なんざ、きつと世界中どこを探したって俺だけだぜ?」

セインは泣きそうになった。

人の親切が、こんなに身に染みたのは、いったい何百年ぶりか。

「・・・ありがとう」

「あんだよ、照れるじゃねえか」

タカはセインの背中をばしばしと叩いた。

キヤルの名にあやかった巨大なバラのケーキは、デザートとして振る舞われ、朝だと言うのに瞬く間になくなった。

楽しくておいしい時間はあっという間に過ぎてしまい、セインとキヤルは、島に行くための小船を下ろしてもらっていた。

「もう少し近づけりゃよかったんだが、後は浅瀬になっちゃって、船が乗り上げちゃうんでな」

「船を用意してくれるだけで十分だわ。第一印象は最悪だったけど、

みんな意外にいい海賊だったし」

「いい海賊、ねえ」

ギャンガルドは言われ慣れない言葉に、こめかみがむず痒くなる。

「タカ、ちよつと屈んで？」

「？何だい」

キヤルに言われるまま、タカは彼女の顔の高さに自分のそれが合うまで屈んでみせた。

ちゅ。

軽い、柔らかなキスを頬に受けて、タカは顔から火が出るほど真っ赤になった。

「お、茹蛸一丁あがり」

「キキキ、キャプテン！」

そのやりとりに、どつと笑いがあふれる。

「お料理とか、いろいろありがと。ケーキ、今まで食べた中で、一番おいしかったわ」

キヤルの笑顔に、タカは照れ隠しに頭をつるんと撫でた。

「今日は一日よく晴れるぜ。けど、明日にゃちよいと風向きが変わるかも知れねえから、気をつけてな」

ラゾワが、キヤルに手を差し出した。

「今度またおんなじ事をしたら、すっぱり切ってあげるから、覚悟しときなさい」

微笑みながら、キヤルは今度こそ、差し出された手を握り返した。

「き、気をつけるよ」

逃げ腰のラゾワに、ギャンガルドが追い討ちをかけた。

「もう、男と女を間違えんじゃねえぞ」

「キャプテン・・・」

再び笑いが起こる。

もう勘弁してくれといった様子のラゾワに、セインが手を差し出

した。

「君とはいろいろあつたけど、この人たちに会えたのは君のおかげだから、お礼を言うよ」

「いいんだぜ、セイン。フォローしてくれなくても」

ギャンガルドがまたそう言うので、ラゾワはセインの手を握り返しながら泣きそうになっていた。

キヤルとセインは、用意してもらった小さなボートを漕ぎ出すと何度も振り返って、クイーン・フウェイル号を後にした。

あれだけ大勢と過ごすのは、二人にはとても珍しいことだった。波の音と、海鳥の声しか聞こえなくなると、妙に静かに感じられた。

「楽しかったね」

「おいしかったわ。タカだけでも連れて来られたら良かったのに」

「そんなことしたら、皆が飢え死にしちゃうよ」

キヤルはよほどタカの料理が気に入ったらしい。

「淋しい？」

「・・・別に？」

「きつとまた会えるよ」

「・・・そうね」

二人は岸に着くと、ボートを砂浜に上げて、近くの木に満潮になっても流されないように、ボートのロープをくくりつけた。

「さて、どこから回ろうか？」

がさがさと、キヤルがカバンから地図と携帯用の方位磁石を引っ張り出した。

「ええと、この浜辺がここだから、何かありそうなところは、つと・・・」

キヤルが、小さな指で地図をなぞっていく。

「あ、ここは？」

セインが、今いる浜辺とは逆の、島の反対側に、小さな岬を見つけた。

「・・・うーん」

渋るようなキヤルの仕草に、セインはもう一度聞いてみる。

「・・・だめ？」

「いえ、別にいいのだけど、そこ、あんまり行きたくないっていうか・・・」

「どうして？」

「カルド岬。魂の岬。つまり」

「あ、いい！分かった！言わなくてもいい！」

嫌がるセインに、キヤルはにやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「ご名答よ。こちら一帯の亡くなった人を奉る場所がここ。行ってもいいわよ？何か手がかりがあるかもね？」

「ええ！？だめだめ！だってここ、鳥葬にするんでしょ？絶対に駄目！」

鳥葬とは、亡くなった人の身体を鳥に食べてもらう事によって、鳥に魂を天に運んでもらう葬儀のことである。

死体が隠されもせず風に晒されて、鳥についばまれて内臓などがぐちゃぐちゃに散らかっているような、言わば新鮮なそれを見てもまえるかもしれない、そんな場所が、その岬なのだ。

「行かないわよ。まあ、遠目から見る程度には行っておきたいけど。あたしだってそんなとこ、ごめんだわ」

キヤルの言葉に、セインは心底胸をなで降ろした。

「セインなんて何百年も生きてるんだから、見慣れてそうなのに」

「見、見慣れたくないよあんなもの！う、気持ち悪い」

何かを思い出させてしまったようで、セインは口元を押さえて座り込んでしまった。

「・・・悪かったわ。そうよね。人の死骸なんて、見慣れてしまったほうがどうかしてしまうわね」

キヤルはセインの背中をさすってやった。

セインの具合がよくなってから、二人はとりあえず島を回ってみることにした。

結構思ったよりも大きな島だったが、奉られているだけあって道は整備されていた。このぶんなら、一晚泊まれる小屋くらいはどこにあるのかもしれない。

「あれ？キヤル、ちよつと待って」

セインがキヤルの腕を取って引き止めた。

「何か、聞こえない？」

キヤルは耳を澄ましてみるが、鳥の声と、遠くから波の音が聞こえるだけで、別段、足を止めるほど変な音は聞こえなかった。

「・・・別に？」

「そう？僕の聞き違いかなあ」

セインがそう言って、キヤルの腕を放したときだった。

「クエエエエエエエエエエ！」

「！！！！！」

突如目の前に現れたのは巨大な鳥。

いや、鳥というべきなのか。

「何あれ足が三本ある！」

「鳥獣ロツクバードだよ！まさかこんなところに生息しているなんて！」

地面に伏せることで一撃目を何とかかわした二人は、第二撃目が来る前に全速力で走り出した。

「鳥葬って、なるほどね！ロツク鳥はここでは神の代行者というわけか！」

「あんなのが神様？」

「この一帯の人々にとってはそういうこと！」

あんなのに食べてもらって、天国に行けるとは到底思えないし、思いたくもないのだが。

「クエエエ！」

「わあ！」

容赦のない爪の攻撃から身をかわして、何とか隠れる場所を探す。
「もう！セインを引っこ抜いてからロクなことない！」

「ええ？ひどいよ今それを言う？」

気がつけば、道から外れて森の中を走り回っていた。

「も、森の中だったのに、どうして飛びかかって来れるのよ」

「翼を折りたたんで急降下して来るんだよ。飛び立つときは三本の足で地面を蹴り上げるから、翼を広げなくても簡単に空に舞い上がれるんだ」

「そんなうんちくはいから！セイン、あれ！」

キアルはセインの持つ、自分のカバンに手を伸ばした。

「ええ？駄目だよキアル、出来ないよ」

「あ、あんたね、この状況でそういうことを言うわけ？」

走り回って息が上がってきていた。

追い払えそうにもない上に逃げ場所もないとなると、倒すしかないかと思っただが。

「だって神様の代行者を殺しちゃったら街の人たちがこわいよ？」

「う」

それももつともなので、キアルは泣きそうになる。

「もう！どうしろって言うのよ！」

カバンはセインに持たせているから身は軽いとはいえ、このまま逃げ回るしかないのだろうか。

「きゃあああ！」

いきなり横合いから突き飛ばされて、キアルは自分がロックなんとやらの捕まったのかと思っでぎゅっと目を閉じた。

エルグランド島（２）

「キヤル、キヤル」

呼ばれて目を開けると、遠くにあのでかい鳥が見える。

「セイン？」

「驚かせてごめん。大丈夫？」

横からの衝撃はセインが自分を抱えながら飛び込んだためのものであることに気付き、キヤルはほっとした。

「ここは？」

白い、朽ちかけの壁と柱。

丸いドームのような天井。

何かの建物に飛び込んだのは分かったが、外ではまだあの鳥が、しつこく飛び回っていた。

「ここには近づけないみたいだね」

「そうなの？」

「うん。あわてて飛び込んだけど、この中に入ってから、降りて来ないもの」

そう言われてみれば、上空を旋回してはいるものの、それだけで先ほどの急降下もなく、しばらくすると諦めたのが遠くへ飛んでいってしまった。

ほっとしてから、カバンから引っ張り出して地図を広げてみるが、朽ちた建物は用を成さなくなつて長いのか、紙面にその姿は見当たらなかった。

「ずいぶん古い建物だね」

「何に使われていたのかくらい、分からないかしら」
きよるきよると見回してみる。

自分のちょうど真後ろ、建物の中心に、小さな柱が立っていた。柱の上には、ちょこん、と丸い石が鎮座している。

「と、届かない」

「取りたいの？」

「触りたいの」

背伸びをするキヤルの両脇に手を入れて、セインが彼女を持ち上げてやる。

「セインって、こういう時便利よね。ム力つくけど」

「なんでそこでム力つくかなあ」

「背の高い人間に知る権利はないわ」

キヤルはそっと、石を触ってみる。

「何の石かしら？」

「見たことがないね」

青く輝くそれは、水晶でもなく、サファイヤでもなく。

とりあえず、何の石なのか分からないのでセインに体を降ろしてもらうつ。

「ここにこうしてあるんだから、多分この位置から動かしちゃ駄目よね」

「多分ね」

しばらく石と睨めっこしていたが、目の前にあるのが頭の上にあるうが、分からないものは分からなかった。

「仕方がないわ。ほかに何かないか探しましょう」

キヤルは考えるのをやめて、また建物の中をきょろきょろと観察する。

お世辞にも大きいとはいえないこの建物に、あのロック鳥が近づけないというのなら、必ず何かがあるはずだ。

「あ」

セインが声を上げた。

「どうしてあたしじゃなくて、セインが見つけるのかしらね」

ぼそりとつぶやいてみたが、仕方がないのでセインの側へ行ってみる。

崩れた壁の中に、正三角形のプレートが埋まっていて、セインがそれを掘り出した所だった。

「読める？」

「何とか。古代文字だね。ええと・・・」

こびり付いた埃や壁の屑なんかを丁寧な払いながら、セインが文字を指でなぞってゆく。

「えつと・・・聖なる道しるべを示すものなり。聖者、この地に降り立つを望む、尊き光が・・・ええと？」

「それ以外は？」

「分からないな。崩れちゃってる」

「それにしても尊き光って何よ。わけが分からないわ」

両手を腰に当て、ふん、とキヤルが鼻で息を吐き出した。

「でも聖なる道を示すってあるよ？」

「その聖なる道ってどこへ続く道なのよ」

「僕に聞かれても」

ボカ

「・・・痛い」

殴られて落としたようになったプレートを、セインはなんとか持ち直して頭をさする。

キヤルの側ではなるべくしゃがんだりしないようにしよう、そう思いながら、もう一度、何か読めないかと、プレートの汚れを拭いてみる。

ぐううう

キヤルがお腹を押さえた。

「セイン、お腹すいた」

まだプレートを眺めているセインに、キヤルはタカの包んでくれた弁当を要求した。

「ああ、もうお昼だもんね。走り回って疲れたしね」

セインはキヤルのカバンの中から包んでもらった弁当を取り出すと、腰に下げてあった水筒を取り出した。

余ったスープを、タカが気を利かせて持たせてくれたものだった。早速弁当を広げると、冷めているというのに、ぷん、と良い香り

が鼻をくすぐった。

「やっぱりおいしそう!」

中身を覗いて、キヤルは喜んだ。

揚げた肉をタレに漬け込んだものを、野菜と一緒に挟んだサンドイッチに、ロールキャベツ、焼き海老にピリツとしたソースを絡めたものや、魚の肉をぶつ切りにしてカブに詰めてふかしたものなど、豊富な内容に、見ているだけでだれが出そうだった。

「忙しいのに良くこんなに作ってくれたなあ」

そのどれもが、朝食の皿にはなかったもので、二人のためだけに作ってくれたものだと言ひ知ることが出来た。

二人はタ力を褒め称えて、感謝しながら弁当を食べた。

どの料理もおいしくて、全部食べてしまつのが惜しいくらいだった。

「さて、どうしよう?」

お腹が膨れたところで、セインはキヤルにプレート差し出した。「さっきのプレートじゃない。何かあった?」

「うん、このプレート、対になつてゐる部分があるらしいんだ。それを探してみようかと思つて」

一見、端々が風化して削られているために、三角形に割れて崩れているように見えるが、実際は欠けてもいないようだ。なのに、文章が途中で途切れている。

ならそれは。

「もう一枚あるつてこと?・・・そうね。外へ出たところでまたあの馬鹿鳥に襲われでもしたらたまらないから、移動は日が暮れてからにしたいし」

キヤルは考え込んだ。

慣れない土地だ。

島とはいえ、本なら明るいうちに移動するなら移動してしまいたい。だが、あの鳥が邪魔をするから、どちらにしろ移動は薄暗くなつてからになる。

「でもこの小さな建物には、あの青い丸い石と、このプレートしかない。・・・わかったわ。手がかりがありそうなら、それを探してみるしかないわね」

そう決めると、キヤルはもう一度、プレートがあつた場所を、丹念に調べ始める。

セインも、他に何かないかと、柱や壁を調べ始めた。

数時間が経過して、二人とも程よく衣服が真っ白になった頃。

「ああ、もうだめ」

キヤルが根を上げると、セインも続いて床に座り込んだ。

「見つからないね」

「・・・建物の外壁にあるのかしら」

「探したよ。けど外はきれいさっぱり壁だったよ」

「よくあの鳥が来なかったわね」

「だって建物から離れなかったし」

「あ、そう」

内にも外にも、プレートは一枚しか見つからず、出てくるのは何がしかの絵と壁の屑だけだった。

「数枚の絵から察するに。ここは祭壇だったようだね」

「でも、肝心の何を奉っていたかが分からないわ」

見つかった、多分壁画であつたのだらう数枚の絵は、この建物と思われる白い祭壇に、人々が供物をささげている絵であつたり、何かの儀式か、仮面を付けて踊っている絵だったりで、肝心の神様の絵がなかった。

「つつかれたー」

小さな空間とはいえ、壁やら天井やら、くまなくチェックすると、かなりの労力が必要だった。気がつけば太陽はもう島の山の中に姿を隠そうとしていた。

「あーあ。とりあえずポートまで戻る？」

「待って、くたびれちゃって。ちよっとだけ休みましょ」

日が傾けば、暗くなるのも早い。

それは知っているが、怪鳥のこともある。もう少し休んでもいいように思えた。

キラ

「あ？」

目端に、何か輝いたかと思った瞬間、まばゆい光に襲われて、二人とも目を庇った。

エルグランド島（3）

そろりと目を開けると、夕日が山の頂上に、ちょうど触れたところだった。

「セイン！ちよつと！」

キヤルがあわててセインを手招く。

何事かと思えば、あの青い石が、今は白く輝いて、その中に、なにか文字が金色に浮き出していた。

「これ、プレートが続きだよ！」

「早く読んで！」

急かされるままに、セインは読み上げた。

「続けて読むと、こうだ。聖なる道しるべを示すものなり。聖者、この地に降り立つを望む、尊き光が彼の者の頭上に触れるとき、その姿を現し、大鳥をもつてこの地の守護とせん。我らに光あれ」

セインが読み上げると、ぽうつと石は光だし、一筋の光を引いた。その光はまっすぐに、陸のほうへと伸びている。

しばらくすると、ふうつと消えてしまった。

「・・・えつと？」

「これ、単なる石じゃなくて仕掛けがあっただね」

複雑に鏡を組んで、山の頂上に太陽が触れるときに文字を浮き上がらせ、山の向こうにある程度太陽が隠れるまで、光を海に向かつて放つように作られた、人工のものだったのだ。

「聖なる道しるべっていうのは海の道筋で、聖者っていうのは太陽で、彼の者つてのはあの山で？これを守るためにあの馬鹿鳥を飼ってたってこと？」

「まあ、ロックバードの寿命もあるから、あれは何代目かの鳥だろうけど。町の人たちはこの光とロック鳥のおかげでここを聖域にしまったんだろうね。聖域にいる聖なる鳥だから、いつの間にか鳥葬なんて風習が生まれたんだろうし、太古の人々はそんなつもり

もなかったんだろうけど」

「そんなことはどうでもいいのよ！つまるどころ、この島の伝説やら何やらって、単なるこの灯台の噂ってこと？」

「・・・そうだろうね」

「うつわ骨折り損のくたびれ儲けだわ！」

キヤルは今度こそ、どっかりと座り込んでしまった。

気が抜けるとはこのことだ。

太古の人々は、この島と陸とを結ぶ船の道しるべを必要とした。

それで、この石とお堂を作って一定の時間、光で道しるべを浮き上がらせた。

多分、潮の流れが関係するのだろう。

昔、ここの界限は渦を巻くほど流れが速くて危険だったが、大きな地震がやはり昔あって、それから流れが穏やかになったと、町の年寄りの日向ぼっこに付き合ったときに聞いたのを、セインは思い出していた。

だから、まあ、絵の中にあった、人々が供物を捧げているのはきっと太陽そのものであって、神を奉るとか、そういったことではないのだ。

「でもキヤル」

「何よ」

「単なる灯台って言うけど、さっきの光景はきれいだったじゃない？」

夕暮れの光の中を、金色に輝く一筋の光が貫く様は、幻想的だった。

「まあね。あれを船上から見た人が、天に上る階段を見たとか言っただんでしょうね」

「うん。本当に天に続いてそうだったもんね」

「・・・まあね」

それに、この丸い石の技術は素晴らしいものがある。どうやったらこんなものができるのか。

「これ、高く売れるかしら」

キヤルが物騒なことを言い出した。

「・・・無駄だと思うよ？一見普通の石にしか見えないし、持って行ったところで、さっきみたいに光るには、角度とか色々計算されて作られているだろうから、この場所でないと無意味だろうし」

「・・・やつぱり？」

キヤルはがつくりと肩を落とした。

最終的にはおいしいものも食べられて楽しかったとはいえ、誘拐されてみたりななりと、あれだけ苦勞してここまで来たのに、見つけたものが単なる凝りに凝った灯台だったでは、先ほどの景色だけでは物足りないようだった。

「とにかく、一回ボートに帰ろうか？それともここで一晩泊まって行く？」

気が付けば辺りはすっかり夕闇が押し迫ってきており、東の空には一番星が瞬いていた。

「ボートに帰っても、屋根なんかないんだから、ちょっとした壁と屋根があるだけこのお堂のほうがマシだね。ここで寝ましょ？」

とはいうものの、とりあえず火は焚いておきたい。

「まあ、火事にはならないと思うけど」

ロックバードも姿を見せなくなっではいるが、二人はそれでも、建物にすぐ駆け込める距離で薪を集めた。

「足りるかな？」

「大丈夫じゃない？これだけあれば」

お堂の周辺だけでは木の枝は思ったより見つからず、茎の太いススキや萱なんかが混じってしまった。

「なんか心もとないなあ」

火を入れてみれば当然、枝よりも早く燃え尽きてしまう。

「松明用に枝を一本残しておいて、もし足りなくなったら拾いに行けば？」

「・・・誰が？」

「セインが」

「・・・・・・」

さらりと酷いことを言うキャルに、セインはそつと眼鏡を押し上げて涙を拭いた。

「何よ、あたしは成長期なんだからね？！何百年も前に成長が止まっつてうすらばーっとなったセインより睡眠とらなきゃいけないんだからね！」

「こんな時だけ成長期を主張されても」

ぶつくさと言いながら、それでもセインはキャルのために寢床を用意する。

とはいっても、彼女のカバンに入る程度の膝掛けしか今はなく、セインは自分の上着を、枯れ草を敷いた床の上に広げてやる。

それをベッドにして、さらにカバンを枕代わりにキャルが寝息をたて始めると、大きな手の平を、膝掛けの中に体を押し込めて眠る彼女の体に、そつと置いてやった。小さな体は、セインの手の平でも十分にお腹を隠してしまえる。

これで少しは、セインの体温で温まってくれるだろう。

「おつと、いけない、いけない」

火が小さくなり始め、セインは薪と萱を炎にくべると、キャルの提案どおりに、取っておいた松明代わりの枝を手にとって、新しい薪を探しに行こうと腰を上げた。

ぐらりと、くすんだ白壁に、自分の影が移りこむ。

二つの焰に照らされて、巨大に蠢く己の姿に、苦笑が零れる。

化け物と呼ばれ、自ら数多の命をその手にかけ、全身を血で濡らし。

そうして結局、何が守れたのか。

守れたものなど、あったのだろうか。

化け物。

大賢者などと。

化け物のほうが自分にはふさわしい。

今となつては遙か昔のこととはいえ、罪は消えることはない。

この蠢く影そのものが、己の本当の姿なのかもしれないと、セインは自嘲した。

「ウ・・・ン・・・。セインのばあか」

もそもそと、固い床で寝苦しいのか、キヤルが寝返りを打った。

「キヤル？」

金の睫毛は伏せられたまま。

あどけない少女は、また心地よい寝息をたて始める。

賞金稼ぎのこの子供は、いつからこんな生活をしていたのか。

食べていくためにやっているだけよ

そんなことを、彼女はいつだったか口にした。

「僕なんかより、君のほうが大変そうなのに」

小さな身体で両手いっぱいセインを包み込んでくれるこの少女に、セインは敬意を込めて、額にキスを贈る。

たった八歳で自立して、大人の賞金首を相手に大立ち回りを繰り広げる彼女の過去を、セインはまだ知らないでいる。

彼女もセインの過去を、すべて知っているわけではない。

それでも、セインは彼女から、たくさん大切なものをもらった。眠っていた五百年。いや、封印する前の出来事全部ひっくり返しても、彼女と出会った三ヶ月の間に、手に入れたものはとても大切で、セインは、キヤルを起こさないように気をつけながら立ち上がった。

「あれ？」

セインの手にした松明は、背の高い彼が立ち上がると、ちょうど中央の、あの丸い石を照らす形となった。

セインは明かりがキヤルの顔にからないように自身の体で影をつくり、そうつと石に近づいてみる。

「？」

どういった作りになっているのか。

石の中には、昼間に見たものとは違うものが映し出されていた。丸い輪の中に、細かな文字が、まるで模様の様にびっしりと書き付けられている。

「これも、古代文字みたいだけど・・・」

どこから読んだものか。セインは文字の羅列を指で追ってゆく。

コーン

「・・・え？」

ガゴン

ゴンゴンゴン

ゴゴン

急に、足元から何か甲高い音がしたかと思えば、その音は徐々に重みを増して大きくなってゆく。

「んー？何？」

目を擦りながら体を起こしたキヤルに、セインはしまったというような顔をして、それからひどく情けない声を出した。

「キヤル、ごめんね？僕またなんか余計なことをしたみたい」

「は？」

寝ぼけ半分で、セインに近づきながら、キヤルはぼんやりする頭を振って、状況を把握しようと室内を見回した。

ガゴンンンンン

「へ？」

妙な音に嫌な予感を覚えてみれば。

「きゃあああああああ！」

床がすっばりと消えた。

「あああ、ごめんよキヤル」

「い、いいい、いいから何とかしなさいよ！」

落下しながら出る涙は、やっぱり上へ飛んでいくんだなあと妙な感想を抱きつつ、セインは両手を合わせて剣を取り出すと、壁を蹴ってすぐ隣を落ちるキヤルを捕まえ、そのまま向かい側の壁へ剣を

突き刺す。

ガリガリと壁をいくらか削り、二人の体はなんとか停止した。剣を出す際に手放した松明が、落ちて消えるのを眺めながら、ほとと胸を撫で下ろす。

「何やってるのよセイン！」

「ご、ごめん」

手足をバタバタさせるキヤルに、セインは彼女の腰を抱える腕に力を込めた。

「キヤル？」

「なによ！」

「あんまり暴れると落っこちちゃいそうナンドスケド」

キヤルは体を強張らせて大人しくなる。

セインの額に流れる汗は嘘ではないだろうから、暴れて手を離されたらたまらない。

「・・・？」

「どうしたの？」

「セインの顔が見えるわ」

「・・・えつと？」

一瞬自分の顔を見るのが嫌なのかと思ってしまったが、よく考えれば松明を落としてしまつて灯がないはずの今、そういえば自分もキヤルの顔が見える。

「これのせいかな？」

顔を上げてみれば、あの丸石が、ふわふわと漂いながら光を放っていた。

地下通路

「・・・飛んでるわね」

「うん。・・・飛んでるね」

本当に、一体どういう作りをしているのやら。

キヤルが手を伸ばすと、ふわりと自分から近づいてくる。

「あ、もしかして」

「へ？」

ぽつりと言うと、セインが急にキヤルの体から腕を離してしまった。

「ちょ！ちよつとセイン！」

落ちる！

そう思っ
て思い切り叫んだ。
が。

「大丈夫だよキヤル」

変わらない位置から間の抜けた声。

「・・・？」

恐るおそる振り向けば、セインが剣にぶら下がったままニコニコしていた。

「落ちてない？」

「うん。これ、多分飛石じゃないかな」

「ごいん

ぶら下がったまま考えるような素振りを見せるセインに、キヤルは力一杯げんこつをくれてやった。

相変わらずニブイ音だわね」

「痛いよキヤル何するの！」

「うつさい！こっちは心臓が止まるかと思ったんだからね！」

何の説明もなくいきなり手を離されてはたまったものではない。

「おまけに、もしかしてって何よもしかしてって！」

確信もなく手を離れたのかこの大ボケ。

そう言われてセインは改めて気付く。

「ご、ごめんなさい」

小さくなった。

とにかく、小さなお堂であつた割にはたいそうな仕掛けがてんこ盛りで、キヤルはにやりと笑つた。

「キヤル？」

「ふふふふ、いい度胸じゃない！このキャロット・ガルム様をこんな目に合わせて、何にも無いなんていつたらこの島、ただじゃおかないわよ！」

「キヤルが壊れた・・・」

「ごいん

「あたしは正常よ！」

「や、でも」

殴られた頭をさすりながら、セインは島をただじゃおかないってどうするんだろうかと考えてみる。

「このままじゃどうしようもないから、とにかく下に降りてみましょう？」

キヤルは自分の手にした飛石を、セインにも差し出す。

セインが石に触れると、彼の体もふわりと浮いた。

剣を引き抜いてしまうと、石は勝手に下降を始め、ゆっくりと二人を導いた。

足に地面が触れた感触に、セインは石から手を離す。

続いて、キヤルも地面へたどり着く。

二人が手を離しても、石はそのまま煌々と辺りを照らし続けている。

「便利だなあ」

「そうね」

光が届く範囲を見回してみれば、そこは四角にくり抜かれた人口の建造物である事が分かる。

簡素な壁ではあるが、崩れたそこかしこに、着彩された壁画が残っている。

「上の壁と同じ感じだね」

歩きながら、とりあえず観察してみる。壁のつくりや壁画の絵柄や色合いなどが、先ほどまでいた、白いお堂に酷似していた。

「やっぱり、神さまなんかを奉ったものではないって事？」

「うん。珍しいな、普通、こういった建造物には人々が奉った物が、何かしら描かれていたりするものなのだけど」

動物や、それらを狩る人々。

戦争でもあったのか、戦車に乗って槍を掲げる人。

そうして人々の暮らしぶりや、はたまた草花まで。

聖なる者、などという表現があつたくらいだから、何がしかの信仰があつていいと思つたのだが、そんなものは一切なく、まして、古代にはありがちな、王、もしくはその眷属、なんて表現も一切無い。

「これは……。どんな文明なんだろう」

神がない。

王がない。

それではどうやって国を統治していたのか。

無宗教で、しかも人民だけで国家を統治していたのだとしたら、それはとても発達した国家といえる。

人というのは弱い生き物だ。

何か継るものや、責任を押し付けたりできるものがなければ、まとまるのは難しい。

それは太古の昔より、神であつたり国王であつたりと、何がしか己らを支配してくれるものを、自然に生んできた。

それが見当たらないということは、人々がよほど安定した暮らしをしていたということだ。

そしてもうひとつ考えられることがある。

「貧富の差が無い、食べるにも困らない、そういう暮らしよね、こ

れ」

「そう、だね。貧富の差が無い、ということは、人々が共同して暮らしていたということで、何でも分け隔てなく分かち合っていたんだろう。理想的といえば理想的だけど」

「戦が起きた」

何がこの国に起きたのか。

何でも分かち合って共同生活を送り、平和であつたからこそ、何の邪魔もなく技術力が向上し、あんな複雑な構造をした石まで作り出すことが出来た国家。

「相手の国までは分らないね」

壁画は途中で削り落ち、傍若無人な犯罪者を消し去ってしまった。いた。

「セインでも、聞いたことがないの？」

「・・・僕だつて世界のすべてを知っているわけではないからね。自分の国とそれに関わった国のことならいくらか分かるけれど」

セインのいつもと違う口調に、キヤルは彼の顔を見ようと顔を上げたが、キヤルの場所からは、彼の長い髪が邪魔をして、その表情はまでは窺うことが出来なかった。

それでもなんだか、セインが悲しんでいるように見えて。

「セイン？」

不安になって、彼の名を呼んだ。

「・・・何？」

振り向いてくれた彼の顔も口調も、既にいつものものと変わらなideいたが。

「・・・ただ、呼んだだけ」

「そう？」

不思議そうな顔をしたまま、手を差し伸べてくる。

その手を、キヤルはぎゅうつと強く握った。

「怖いのか？」

「な！馬鹿言つてんじゃないわよ！あたしを誰だと思つてんの？！」

腕を振り上げて怒るキヤルに、セインはハイハイ、と言って、思い切り握った手を、優しく握り返してくれる。

「・・・馬鹿」

小さくボソリとつぶやく。

寂しいときは寂しいと、言ってほしいと思うのは、自分が子供だからだろうか。

だって何を考えているのか分からない。

彼の背負っているものが大きいものだというくらいしか、キヤルには分からない。

支えになりたいと思っても、自分はまだ幼いから。

せめて悲しみくらいは分かっただけであげたい。

「ねえ、キヤル」

「何よ？」

ポツリとセインが、零れるように呟いた。

「僕は聖なる剣だとか、大賢者だとか、どこをどう間違っただんな大層な贈り名がついたのか知れないけれど、本当は、ただの大罪人でしかないんだ」

そう言っただ、歩みを止めないセインに、キヤルは何も言わずについていく。

「ごめんね？いきなり変な事言っただ」

「別に・・・。あたしだって、全部をセインに話したわけではないし」

それで、彼の悲しみを分かってるなどと、ずっずっしいのだろうか。

「そうね、我儘すぎね、あたし」

「え？何？」

「うっん、なんでもない」

暫く、二人は黙々と歩いた。

飛石に照らし出された壁画はどれも、古びていながら美しく、飽きることはなかった。

「ねえ、セイン」

突然、キヤルの足が止まった。

「どうかした？」

「神さまがいなくて、王様がいなくて、みんなで共同して暮らしてて、貧富の差がなくて……」

「？」

「それって、エルドラド？」

真剣な眼差しで、壁画を睨みつけている。

「ああ、似てるよね。けど、違うみたいだよ？」

キヤルの様子に少し笑って、ひとつの絵を指す。

「何？それ」

「うん、二人の人がいて、その人たちをもう一人の、つまり第三者が秤で量っているでしょ？」

「うん」

セインの示した壁画には、天秤を持つ仮面を被った人が描かれ、天秤の左右の皿の上に、それぞれ一人づつ人が乗っていた。手には盾と短剣を握っている。足元には農作物。

「この人たちは自分の土地を争っていたから裁判にかけられたみたいだね」

背景に描かれたレリーフが、何を争っていたかを物語る。

おそらく田畑といった土地を争っていたのだろう。

「仲良く暮らしているようで、争いごとはあつたっていうこと？」

「そういうことだね。やっぱり、何事も、喧嘩しないで平和的に、っていうのは難しいようだね」

ある程度具象化された壁画を睨みつけて、キヤルは盛大に溜め息をついた。

「なーんだ」

酷くがっかりした様子に、セインはまた笑った。

「でもキヤル、この国がエルドラドだったとしたら、もう滅んでしまっていたことになるから、そんなにがっかりすることはないと思うよ？」

「それはそうだけど、ちよつとは近づけたのかなーって思ったのに」
ぷつくりと頬を膨らませる。

「ま、なにか手がかりはあるかもね。この国の名前はそのままエル
グランドというらしいから、エルドラドにあやかっただものかもしれないし」

国が滅んで、名前が唯一残された島に残った、ということだろうか。

「それにしても、いつになったら出口にたどり着くのかしら」

「あ、それ、今僕も思っていたところ」

壁画がいくら美しくて見飽きなくても、さすがに歩き尽くめは疲れる。

「空気の流れからいったら、こっちで合っていると思うんだけど」
清々しい、とまではいかないが、こういった洞窟にはありがちな
淀んだ空気とは違って、いくらか呼吸がしやすい。

それに、わずかだが頬に触れる風がある。

セインはそれが吹いてくる方へ向かって歩いて来たのだが、先ほ
どから一向に出口が見える気配が無い。

「まさか閉じ込められたなんて事はないわよね？」

「・・・ははは」

ここが地下である限り、出口が崩落している、なんてこともあり
得るので、その可能性も無きにしもあらずなのだが、それを口にし
たら間違いなくキヤルに一発お見舞いされるので、セインは笑って
ごまかした。

「ま、まあ大丈夫だよ、きっと」

「なんでそう言い切れるのよ」

「え！？だってこの遺跡、多分お墓とかとは違っただろうし、お宝な
んかをしまっておいているっていう雰囲気でもないし、だったら侵
入者を閉じ込める必要が無いわけでしょ？」

何に使われていたのかまでは分からないが、多分共同の施設か何
かだったのだろう。怒られないように慌てて説明する。

「で、でね？僕さつきからイヤな予感がするんだけど・・・」
「何？」

「・・・この方角って、あの岬の方だよね？」

「・・・」

二人の足がぴたりと止まる。

「えっとー？」

キヤルが、カバンからさがさと地図を引っ張り出す。

いまだにランタンよろしく辺りを照らす飛石に、こいこい、と手招きして呼び寄せる。

「これ、便利よね」

「飛石はいろいろ反応するよ？まあ、ここまで精密で凝ったものは、ぼくも見たことが無いけどね」

何故か呆れ顔のキヤルに、気付いているのかいないのか。

セインは普通に説明するのだが、こんな石がゴロゴロしていたらしい大昔とは一体なんなのか。

とりあえずは、それをさらりと無視して、方位磁石で位置確認を試みる。

「白いお堂があつたのってこの辺よね」

島の中央部分を示す。

「そう。マル付けておいたし」

「で、今の位置は、多分だけど大体ここ」

地下に潜っているので、地軸に狂いが無ければの話なのだが、小さな指が指し示したのは、島の中心から沖合いへ向けて南東方面。

「・・・・・・確実に近づいてるね」

その先には、例の魂の岬。

「カルド岬のまん前に出るのだけはごめんこうむりたいわね」

二人とも顔を見合わせて頷き合う。

「でも、空気の流れからいったら、出口はこの先なんだよ」

「別のルートも、引き返す道しかなさそうだし」

そうになると、また延々歩いて、しかも落ちてきたあの縦穴を登る

しかない。

「・・・さっきいろいろ反応するって言ってたけど、この石でもう一度浮かべないの？」

「あー、浮力はあるけど、重力に逆らって人を上昇させるのは無理だろうなあ」

「なんだ。役に立たないじゃない」

「や、すみませんです・・・」

キロリと睨まれて頭を下げるセインだが、キヤルが引き返す気が無いのも分かっていた。

その気があるのなら、飛石の事が分かった時点で、最初からそのまま竖穴を昇ると言い張っていたはずだ。

「そうね。なら決心も付くってモノよ。ただの凝った灯台ではなかったってことは、やっぱり何かあるんだわ」

確実にその顔は嬉々としていて、青い空色の瞳は、まさに輝かんばかりだ。

「とにかくここを出ましょ。それからもう一度探索して、この壁画の意味を調べるのよ。なんなら港に戻って、ここの研究してる人がいないか探したっていいわ」

「そんな人はいないと思うよ？」

意気込み始めたキヤルに、釘を刺す。

「何でそんなことが分かるのよ？」

「だって床に積もった埃」

セインに言われて下を向くと、砂埃で床一面真っ白だった。

振り返ってみれば、自分達二人の足跡が二つ並んでいるだけで、何か落ちていたりするわけでも何も無い。

「ね？研究したりしている人がいれば、足跡くらい残っているはずだよ？」

「じゃあ、私達で調べるしかないわ！」

「そうだねえ」

やる気満々のキヤルに対して、セインはだんだん元気がなくなっ

ていく。

ごいん

「あイタ！」

左の脛を抱えて、セインが飛び上がった。

「キヤル〜？」

「涙眼で抗議したって聞かないわ！なんだってそんなにあんなたつてはヤル気がないわけ？」

うずくまるセインを、キヤルは両腰に手を当てて見下す。

結局両脛を蹴られ、セインは眼鏡をずらして涙をぬぐう。

正直本気で痛い。

「うっ、やる気がないんじゃないかって、カルド岬に行くのが嫌なだけだよ」

奉られたばかりで新鮮な死体だったり、すでに白骨化してしまっ
ていればまだいい。

もし、白骨化しかけ、なんて状態だったりしたらそれはもう。

「あたしだって嫌だわよ・・・」

キヤルの目が泳ぐ。

「我慢するけど、でもやっぱり気が滅入っちゃうじゃないか」
セインの目も泳ぐ。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「ま、まあ、近づいてきたら匂いで分かる・・・かな？」

「セイン、それって・・・」

「言わないでよ、僕だって嫌なんだから」

二人とも、ちょっと胸の辺りを押さえる同じポーズでしゃがみこ
んだ。

「き、気持ち悪くなるからこの話題はとりあえずやめましょう」

「そだね・・・」

お互いの顔に青筋が入っているように見えるのはきつと気のせい
ではないだろう。

「とにかく、さっさと抜け出すわよ！」

気合を入れるように拳を握って立ち上がるキヤルにつられて、セインも何とか立ち上がった。

何となく先程より足取りが重い感があれど、壁画をチェックしながら進んでゆく。

「・・・何にもないっていうのも困ったものだね」

「・・・そうね」

暫く歩いてみたが壁画があるだけでこれといって何もない。

相変わらず何のために作られた建造物なのかは至って不明のまま。

「あれ？」

いいかげん二人とも疲れ始めていたところだった。

扉がぼつんと出現した。

狭い通路の中に、木製の扉が浮かび出たのだ。

「壊れかけてるね」

扉は傾いて、壁との間に隙間が出来ている。

「開けられる？」

キヤルが言うより早く、セインは扉の隙間に手をかけていた。

「せえの！」

力いっぱい引っぱってみる。

ばき！

「うわあ！」

思っていたより朽ちていたのか、扉がすっぽり取れてしまった。

「あ、セイン壊した」

「ただただだつて！」

握ったドアノブに張り付いた扉ごと、尻餅をついてしまった。

ドアの残骸の木枠から向こうを覗いてみると、今までの延々続いていた通路とは打って変わって、広いホールのようになっていた。

天井は半球状になっており、教会の聖堂を思わせる。

「ああー！」

「へ？」

扉があつた向こう側のその空間から、何だか聞き慣れた声がした。

真実の御伽噺

「お嬢ちゃん！」

「ラゾワ！」

こちらを思いっきり指差しているのはあの髭面の。

「何でここに!？」

「いやあ」

えへへ、と笑う顔が、ラゾワの持つランタンに照らし出される。

「実はうちらもこの島に用があつてね」

「ほんとに？」

「セインを追つて来たわけじゃなくて？」

後頭部をこりこりと搔くラゾワに、二人はじつとりと半目で睨みを利かせる。

「な、何だよ、本当だつて！俺たちが探してんのは青くつて丸い・
・・・」

セインとキヤルの眼光に怖じ気づいて、数歩下がったラゾワだったが、急に目が一点に釘付けになった。

「あ————!!!」

いきなりの怒鳴り声に、キヤルとセインは耳を塞いだ。

「な、何よ!」

「そそそそそそそ、それ!!!!!!」

「は？」

ラゾワの指がこちらへ向けて、びしっ!と突き出される。

「あたし達が何したつていうのよ?!」

「お嬢ちゃんたちじゃなくつて!」

よく見れば、自分達より少々斜め上方に、ラゾワの指は伸びている。

「ああ、これ？」

キヤルが飛石を手に捕まえると、ラゾワはもう大騒ぎになった。

「お嬢ちゃん、これどこで見つけた!？」

「なあに? あんたたちの探しモンってこれだったの?」

ラゾワは大きくうなづく。

「港でキャプテンが面白い話を聞きつけたって言って、皆で探せって事になったんだよ」

話すにつれ手振りが加わり。

「それがなんだかメチャクチャ珍しい代物だって言うじゃねえか。はるか昔の伝説の石だとか、青く輝く水晶だとか色々言われはあるみてえだけだよ」

身振りが加わる。

なんだか見ているほうが疲れる。

「浮き石って、今は言うの?」

「ぶかぶか浮いてっから浮き石ってんだろ?」

「いや、僕らの頃には、飛石って呼んでいたんだけど」

「どっちにしたって同じじゃない」

「……え?」

キヤルが、話が長くなりそうだと、しゃがみこもうとした時だった。

ラゾワが一瞬、眉間に皺を寄せて考え込む。

「セイン、あんた今、何だった?」

「?・・・僕らの頃には?」

「その次だよ!」

「飛石?」

「って呼んでただ?」

ずいっと、ラゾワに胸倉を掴まれる。

妙に凄む彼に、セインは何か悪いことでも言ったかと思ったが、石の呼び名を言っただけで、胸倉を掴まれて凄まれてしまうような事をした記憶はない。

「う、うん。そう呼んでいたっていうだけで。ねえ、僕何か悪いこと言った?」

「そこだ！」

「うわあ！」

胸倉を掴まれたまま、今度は思いっきり眼前に指まで指されて、
とうとう両腕を上げて降参のポーズをとった。

「うが！」

奇声を上げたラゾワが、急に脛を抱え込む。

「ちよつとラゾワ。セインが何かしたかしら？」

「キヤル」

「お、お嬢ちゃ・・・」

涙眼のラゾワを見下すキヤルの瞳は冷たくて、抵抗するのも恐ろしい。

「いや、セインの旦那が浮石のことを、飛石って呼んでいたって
言うんなら、昔はそれなりにたくさんあつたって事になんだろ？」

涙眼でラゾワが弁解をするが、キヤルは片眉をぴくりと跳ね上げた
ただで、その氷のような視線は変わらない。

正直、怖い。

「だ、だから、たくさんあるんなら、もっと探して見つけ出せば面
白いことになるんじゃないか・・・と」

「ああ、そういうことか。確かに僕がまだ剣になる前は、たくさん
見かけたね」

ぼん、と手を打つセインの顔を、今度はキヤルとラゾワが、二人
でまじまじと見つめた。

「な、何？」

「セインが剣になる前って・・・」

「そりゃ旦那、どういうこった？」

「あー・・・」

セインは口が滑ったとでもいうように、口元を押さえた。

「うーんと、ここだけの話にしてくれるかな？」

「・・・セイン？」

不安そうに、大きな瞳を歪めるキヤルに、セインは笑ってみせる。

「そうだね、君にはもつと、早く話しておくべきだったのにね」

その声に、キヤルは急に、セインの話を聞いてはいけないような気がした。

「無理に言わなくてもいいのよ？ここには部外者も約一名いることだし」

何も今説明することではない。後で落ち着いたときでも良かった。二人の秘密にしておきたい話になりそうだと、キヤルは思う。

「あ。お嬢ちゃん俺を仲間外れにしようとしてる」

「最初っからあんたは仲間外れよ」

そう、今ここにいるラゾワから、セインの秘密に関わる事柄が外に漏れてもしたら。

ギャンガルドに囚われたときに引き出してしまった、あの恐ろしい想像が脳裏を過ぎった。

もし、もしセインが、キヤルの手の届かないところへ行ってしまったら。

知らず、手が震えだす。

「大丈夫だよ、そんなにたいしたことじゃない。・・・キヤル？」

そつと、セインがその大きな手で、震える手を包み込んでくれる。

「なんだか知らんが、俺が聞いたらヤバイ話か？」

キヤルの震えを見て、ラゾワは心配になったのか、二人をおずおずと見やる。

「んー、君は前科があるからね」

「セインの事をギャンガルドにちくつたのは昨日の話よね？」

セインはにつこりと、キヤルは無表情に。

しかし声音にはちくちくと、見えない棘が生えていた。

「だ、だってあれはよう、別にセインの旦那があの大賢者セインロズドだって分かって報告したわけじゃなくってよう・・・」

逃げ腰に語尾が段々しどろもどろになって、最後に至っては聞き取れないくらいに小さい。

「分かってやっていったことだったら、ラゾワっていう人間は、とう

に海の藻屑だったわね」

嘘ではないと告げる眼に、ラゾワは冷や汗が背中を伝い落ちるのを感じ、ごくりと唾を飲み込んだ。

「キヤル、そこまでにしてあげなよ。ラゾワが困ってる」

セインの助け舟に、ラゾワは首が千切れんばかりに何度も頷いた。
「それに、知られてもたいしたことじゃないから。僕が今まで言い辛かっただけで」

「・・・そう？」

「うん」

セインの説得に、キヤルは小首を傾げてちよつと考え込むと、ふうつ、と息を吐いた。

「なら、いいわ。話、してくれる？」

「うん。どこから話そうか。そうだな。昔、この国が興るよりも更に昔に、一人の愚かな騎士がいたんだ」

セインの話はおよそ八百年の歳月をさかのぼった。

八百年といえば現在のこの国の元になる国が、醜い争い事を繰り返していた頃の話だ。

途方もない昔話である。

「この国はひとつに統合される前、二つの国に分かれていたのは知っているよね？」

ひとつの小さくて豊かな国と、ひとつの大きくて力のある国があった。

回りの国々から身を守るため、小さな国は自然を利用して、国そのものを巨大な要塞にしていた。

北には剣峰ロックガンド山脈。

東に大河グリースブル！。

南にダレス大湿原。

西にグレイトガウン樹海。

これらはなかなか攻略し難い上に、豊かな自然は豊かな富をもたらした。

大きな国はこれを嫉み、小さな国を力任せに滅ぼしてしまおうと考えたが、浅はかな考えは身を滅ぼすに至り、小さな国にいつ返しを喰らって逆に滅びた。

「そんな話だったわね」

「へえ？俺は始めて知ったな」

この国の住人ではないラゾワは、たいして興味がなさそうではあったが、戦いの話となると耳をそばだてた。

その様子に苦笑しながら、セインは更に話を進める。

当時、小さな国には一介の、それこそ目立たないような、平凡な騎士がいた。

戦で武功をたて、落ちぶれた家を復興させるのが望みの、どこにでもいるような小さな存在だった彼は、やがて戦場で、稀に見る才能を開花させる。

数で負ければ地の利を活かし、兵器の性能で負ければ奇襲を仕掛け、助けが必要となれば隣国に自ら出向き、どんな不利な状況でも必ず論破して救援を連れてくる。

そうして軍師としてほとんどの戦を勝利へと導いた。

それだけではない。

前線には先陣切って先鋒を勤め、武芸にも秀で、そんな彼を兵達は慕い、自ずと彼に付き従うようになった。

そんな彼を、人々は英雄と呼ぶようになった。

「へえ、そんなすげえヤツがいたんだ。うちのキャプテンと、どっちがすげえかな」

「でも、今の時代には必要がない才能ね」

二人の感想に、セインは小さく笑う。

「でも、そんな彼も誤算があっただんだ」

そんな男が、たった一度だけ、恋をした。

相手は母国の第一王女。

かたや英雄といわれど、落ちぶれた貴族の息子。

かたや小さいとはいえ一国の王女。

周りが、許すはずもない身分差だった。

騎士は戦った。

王女との仲を国王に認めてもらうために、必死になって戦った。

王女は自分のために、戦場へ自ら赴く騎士の身を案じ、王に泣きながら許しを請うた。

だが、それでも二人の仲は認められることはなかった。

やがて大きな国は騎士の活躍に倒れ、小さな国は大国となった。

そして二人の仲は国民に知られることとなり、国民は二人の婚姻を望む。

国王は恐れた。

騎士の才能と、国民の騎士への支持の高さに恐れ戦いた。

何せ、既にこのときには、数々の戦を勝利へと導いた騎士の豊富な知識とずば抜けた発想力から、彼は英雄以上の英雄という意味を込めて、別の呼び名が付けられていたからだ。どんな窮地にあっても、彼がいれば必ず勝利し、生きて帰れると。

自然に、兵士や国民の間で、彼の存在そのものが勝利への象徴となっていた。

一介の騎士が、国王よりも国民の支持を得るなど、あつてはならないことだった。

「ケチな王様ね。結婚くらい許してあげればいいのに」

「そうは行かなかったんだよ。王女は国の第一王女で、王様には男の子供がいなかったんだ」

「つてえことは、あれか？王女と結婚したヤツが国の王様になるつてえことか」

ラゾワが顎に手を当てて考え込む。

騎士と王女が結婚でもしたら、国の英雄が王になるのだから、国民は大いに喜ぶのだろうが・・・。

「そう。だから王様に見れば、今まで隣国に小さな国と馬鹿にされてきた分、大国の身分のある、できれば王族と王女を結婚させたかったんだ。そうすれば、強力な後ろ盾が出来る上に、成り上がり馬鹿にされることもないだろう？」

「女だからって王位継承権が無いのが悪いのよ。さすが昔の話ね」
キヤルがムツとして言い放つが、八百年経った現在でも、女性に王位継承権や国の首領になる権利の無い国は多い。

「まあね。それに、やっぱり騎士は騎士。どんなに武功を立てようが、王は彼の望みであつたお家の復興を許さなかつたんだ。そんなことをしたら、彼はますます力をつけただろうし、国民の心は王から離れていっただろうからね」

そして王は、騎士を貶める上手い手を考えた。

「負けた国の人々を、奴隷として扱ったんだ」

セインの眉根が寄せられる。

言葉を紡ぐことさえ苦しいようだった。

「それは酷い扱いだったよ」

石切り場や鉱山など、労働条件の厳しい場所へ送り込み、食べるものもろくに与えず、動けなくなるまで働かせた。

そしてそれを、騎士の提案として議題を通ったこととして、工作をしたのだ。

国民は怒り、王女は嘆き悲しみ、奴隷とされた人々は騎士を心の底から怨みあげた。

騎士は失脚した。

「何それ？皆今まで騎士を英雄と祭り上げておいて、誰もかれも彼を信じなかつたっていうの？！」

キヤルが叫んだ。

なんと単純なのか。それも、王の策略だというのに。

「そうだね、信じられないという人もいくらかはいたかもしれないけれど、ほとんどの人が、彼を罵倒したよ。親友でさえね」

人々は英雄が図に乗ったと思い込んだ。

ちやほやされて、何でもできると思い込んでいるに違いないと、彼を罵った。

それでも、彼は奴隷達を救おうと、色々と手を尽くしたが、もともと、彼が奴隷を作ったのだと、今更だと、協力してくれる人物さえいなかった。

それは、王が先に手を回していたからなのだったが、彼はそれでも王を糾弾することはなかった。

まさか王が仕組んだことだとは、夢にも思っていなかったからだ。王は、自分達の結婚を、いつかは許してくれると信じていたからだ。

しかし、望みが叶うことはなかった。

騎士はやがて、国を出ることを決意する。

愛した人さえ自分を信用しなくなった。

守ってきた国民さえ、今や彼を英雄とも、騎士とも呼ばなくなつた。

彼は深い悲しみに囚われた。

「文字通り、失望したのさ。自分と親しくしてきた者たちも、彼を愛してくれた人も、血を分けあつた肉親でさえ、誰一人、自分を信じてくれる人がいなかったんだ。必要とされなくなったのだから、国を出ようと思うのも、当然といえば当然のことだろう？」

だが、王がそれを許さなかった。

惜しくなったのだ。

騎士の類稀なる才能が。

奴隷制度は王の手によって見直され、奴隷達は解放される。

騎士は奴隷という人種差別を強いた罪に問われ、幽閉されること

となった。

塔に閉じ込められ、王に智恵を貸すことを強要された彼は、頑なにそれを拒んだ。

やがて彼は狂気の中で、ひとつのことを望み始める。

一振りの剣になりたい。

そうしたら、誰にも支配されず、強要されことなく、人を信じることもなく、ただその刃に光を映しこんで、そこにあればいいのだ。

「剣の使い手だった騎士らしい考えだった。そうして、牢には一振りの剣が残された」

セインが話し終わると、ホールの中は静まり返った。

長い沈黙。

何かにすぎるかのように、ようやく、キヤルが震える唇をこじ開ける。

「セイン、その、騎士って・・・」

ひっそりと、セインは笑って応えた。

「騎士に、人々が与えた称号は、奇跡の大賢者、だったよ」

彼がどうやって剣にその身を変えたのかは分からないという。

ただ、飽くことなくそう願っていたのだと、そう言ってまた笑った。

「んな事が、あるのか？」

ラゾワも、顔が青ざめていた。

「僕が手を合わせると、その間の空間から剣が出てくるのは見ているよね。あれだって、普通じゃ考えられないだろ？」

ここにギャンガルドがいたら、どういう反応を示すだろうか。

「きっと、信じられないような顔をして、さらりと納得するのよ」

「ああ、キャプテンならそうだろうな」

御伽噺さえ信じると言うギャンガルド。

それを言うなら、目の前にいる大賢者セインロズドそのものの存在が、御伽噺だった。

「だってあんた、こうしてここに立っているじゃないか。剣になつたって・・・」

「ああ、それはこの姿のほうが都合がいいからね。本体は剣なんだ。しいて言えばこの体は鞘なんだよ」

「物騒なことだな」

「まあね」

セインにしてみれば当たり前のことなのだろう、さらりとした彼の態度に、ラゾワは背筋が寒くなったような気がした。

「ああ、これで少しは重荷が取れた気がするよ」

「あたしは余計に重くなったわよ」

肩を押さえてコキコキと首を鳴らすセインに、キアルは恨めしうに上目使いでねめつけた。

「・・・ごめん」

「いいわよ。しゃべってくれないことの方が辛いもの」

ふいっと、そつばを向かれて、セインはやれやれと頭を掻く。

「とにかく、その頃にはこんな感じの飛石がよくあったんだ。これのおかげで、夜はガスを使わなくても明るかったし、戦場でも色々と役立つたよ」

「へえ、こんなのがごろごろとそこいらへんにねえ」

ラゾワの興味はすぐに飛石に移ったらしい。感心そうに青く光る石を見つめる。

「ごろごろと、まではいかないかな。これは一応精密に出来た機械だからね。とても高価なもので、持てるのはお金のある人たちだけだったんだよ」

飛石をいくつ持っているかを競うのは、貴族達のステイタスにも

なっていたらしい。

セインは戦のためにそれを借り受けるのに、苦勞した程だと笑った。

「あれ？てえと、あんたそのまま封印されてたってことか？」

思いついたように言うラゾワの、興味の移り変わりの速さに、セインはまた苦笑した。

「いや？僕が封印するのはまた後の話。それに、封印されたんじゃないくて、封印した、んだけどね」

「されたんでなく、した？そりやどついうこつた？」

「えーつと？」

セインはちよつと考え込むような仕草をして、もったいぶらせてから、につこりと微笑んだ。

「それは秘密です」

「ああ？！」

がつくりと肩を落とすラゾワに、セインは楽しそうに言う。

「だって、この話まで君にしまったら、キヤルと共通の秘密がなくなっちゃうもの」

「・・・乙女か、おめえは」

「どうとでも？」

にこにこと嬉しそうなセインに対して、キヤルは耳まで真っ赤だ。
「あれ？キヤル？」

心配そうに覗き込むセインの額を、キヤルはグウで殴り飛ばした。
「ごいんいんいんんん・・・」

奇妙な音が、地下のホール内に反響した。

思わぬ獣道

「いったああああい！」

「恥ずかしいことをさりと云うんじゃないわよあんたって人は！」

「うう、だってほんとのことなのに」

「！！！！！！！！」

耳までか全身真っ赤になったキヤルを見て、ラゾワは溜め息をついた。

「やべえ。天然だわ。こりゃ」

天然のスケコマシ。

八歳の幼児までも引っ掛けてしまう恐ろしさだ。

「と、とにかく、ラゾワがここにいてるってことは、どこからか入ってきたって事よね？」

セインをげしげしと足蹴にしながら、キヤルがラゾワに振り返ったので、急にそれた話題にラゾワはあわてて答えた。

「あ？ああ、この先の……」

そのまま自分の真後ろを振り返ったラゾワだったが、指そうとした指もそのまま、きよろきよろしたかと思えば沈黙してしまった。

「……なんなのよ？」

キヤルはそこでようやく、ホールの中を見渡した。

「ねえ、ラゾワ」

「はい？」

「扉が三つあるわね」

「へえ、そうですねえ」

「……」

今度はキヤルまで沈黙してしまった。

「え？ちよつと待ってよそれじゃあラゾワ、君ってもしかして」

二人の様子に事態を察したセインが、早口でまくし立てた。

「えへへへ、そのとおりで」

がいん!!!

脛を抱えて飛び上がったラゾワを、キヤルは無視してセインに向き直った。

「迷子になったわ」

「・・・・・・ははは」

三つ扉があるうちの一つは、セインたちの背面に。

もう二つは、右側と左側に。

ちょうど丸いホールを三等分する位置に、それぞれの扉があるらしかった。

「どっちから自分が出てきたか分からないなんて、すでにボケてんじゃないの？」

「人を蹴りつけておいて、そりゃないよ、お嬢ちゃん」

脛を撫でているラゾワの涙眼はそのままだ。

「とにかく、ここにも仕方がないんだから、どっちの扉が選ばないと」

今まで微かな風の気配をたどってきたが、このホールの中では半球形をしているためか、空気そのものが円を描くように循環してしまっていて、流れの本元を辿れそうにない。

扉も、セインが壊してしまったもの同様、残りの二枚も木で出来た、平凡な、特にこれといって特徴のないものだった。

「壁はあれこれ装飾してあるのに扉はシンプルってどういうことよ？」

「とりあえず両方開けてみたらいいんじゃないか？」

ラゾワの提案に、キヤルはむうつと頬を膨らませた。

「じゃあラゾワ開けてよ」

「えええ〜？」

開けて何かが飛び出したらどうするのか。

「あ、それはちょっと待って？」

ホールの中央まで出ていたセインが、天井を見上げながらキヤルとラゾワを引き止めた。

セインは飛石を天井付近まで飛ばして、首を傾げながら何か考え込んでいるようだった。

「どうかしたの？」

側へ駆けつけるキャルに視線を下ろし、セインは困ったような表情を浮かべた。

「ちよつとね、ここ、競技場だったみたいだから」

彼が指し示す天井絵を見上げれば、何か巨大な獣と盾と剣を持った人間が闘いを繰り広げていたり、何がしかの武器を携えた人間同士が威嚇しあっていたりと、結構物騒な図柄が描かれていた。

そうしてよくよく周囲を見渡せば、周囲には低い壁がぐるりと張られ、その奥は一見階段に見えるが、おそらくは観客が座るベンチなのだろう。

「競技場？・・・闘技場？」

「競技場かと思っただけど、これはどうやら・・・闘技場、らしいね」

扉にばかり気を取られていたせいもあって、境目もなく張られた壁に気がつかなかった。

「でもよ、大昔の話だろ？もし猛獣が居たとしたって、とっくにおっ死んでんじゃねえか？」

まさかといった体のラゾワだが、では、彼らギャンガルド一派は、あの怪鳥には出くわしていない、ということか。

現在地上に残っている連中は定かではないが。

「セイン、カバンは持つてるわね？」

「うん。大事なものだからね」

セインは両手を合わせて彼の本体を引きずり出し、キャルはカバンをセインから引き取って中身をチェックしだした。

「おいおい、大げさだなあ」

「僕らね、上でロックバードに会ったんだって言ったら、君そんなに悠長にされる？」

セインが慎重に、右側の扉の周りを調べだす。

「ロックバードって、足が三本あって、やたら馬鹿でかいていう？」

「うん。確かに三本、足があったわね。私の頭くらいの鉤爪だったわ」

キヤルが答える。

「いや、なんだってそんなモンがいるんだよ」

「ここを守るためだったみたいよ」

「でも地上での話だろ？ここは地下だし、さすがに、なあ？」

それには、今度はセインが答えた。

「あの天井画に描かれた獣。あれ、もともと洞窟なんかを好む猛獣だって言ったら？」

描かれているのは三つの頭を持つ、黒く巨大な獣。

その姿は犬のようで、性格は狼のように獰猛な。

「ケルベロス。僕も、実物は見たことがないけどね」

「け、けるべるすだとう？」

話の中でしか聞いたことのない幻の獣の名だったが、それと同様の生物であるロックバードが地上にいたというのなら、この地底にケルベロスなんてとんでもないものが生息していてもおかしくない。と、この二人は言うのだろうか。

「変な発音しないでよ」

「だ、だってケルベロスつつたら」

口から炎を吐き、動きは見た目どおり俊敏で、その牙は何でも貫き切り裂く。

「つがいで飼われていなかったことを祈るしかないわね」

ふふん、と、キヤルはラゾワを笑ったが、キヤルもケルベロスなんかとは合わせはごめんだった。

もし、つがいで飼われていて、この途方もなく広いだろう洞窟の中で繁殖なんかされていたら、たまったものではない。

「最悪ケルベロスだとしても、他の獣かもしれないしね？」

慰めるようにセインが二人に話しかけるが、ケルベロスでないに

しても、相手はこんな闘技場で使われるような獰猛な何かなのだから、とにかくこの国が滅んだときに、一緒に滅んでいてくれていることを祈るだけだった。

右の扉を調べ終わったセインが、左の扉を調べようと、飛石を呼び寄せたときだった。

「・・・なんか、生臭くない？」

「・・・脅かすなよ、嬢ちゃん」

「・・・とりあえず右の扉には近寄らないでね？」

セインが二人を振り返って、えへへ、と笑った。

「て、どうということよそれ！」

「右は獣の毛がついてたりとか端っこに爪痕があったりとか、そういうことだよ」

「じゃあ、左は？！」

「それを今から調べようとしてたんだけど・・・」

カリカリカリ

爪で木を引っ掻くかすかな音が、ホールに響いた。

「い、今、かりかりって、いわなかったか？」

ラゾワが、思わず後ずさった。

「ラゾワ君、よく出てこれたよねえ」

コフツ、コフツ

左の扉の向こうから、何だか鼻息まで聞こえて来た。

「右も左も、獣用の扉だったってことだね」

「んな悠長なこと言ってる場合か！」

この男が本当に、はるか昔のこととはいえ、騎士で、軍師で、剣の使い手で、ひとつの国を滅ぼしたものなのか、ラゾワは疑いたくなかった。

ガアアアアア！

びりびりと、鼓膜が破れそうな咆哮と共に、巨大な身体が扉を吹き飛ばして宙を舞った。

「げえ！」

白い体毛に巨大な牙。

輝く眼光は赤。

それはケルベロスではなかったとはいえ、一同を震撼させた。

「サーベルタイガーって、んなのありかよ！」

「実際ここにいるんだからしょうがないじゃない！グダグダ言っていないで走る！」

後退しようにも、後ろの扉はセインが壊してしまっている。

左の扉の奥には何がいるのか検討もつかない。

下手をすればそこケルベロスが潜んでいるのかもしれないのだから、今サーベルタイガーが出てきた右の扉に駆け込むしかなかった。

「あんたほんとにどうやってここまで来たのよ！」

キヤルが叫ぶ。

「いいから早く！」

セインが二人とサーベルタイガーの間に割って入り、白い獣と対峙する。

「セイン！伏せて！」

キヤルの言葉に、セインはサーベルタイガーから視線を逸らさずに、脇へと飛び退った。

ドドドン！

一瞬の閃光が三つ。

ラゾワがキヤルを見やると、片膝をついた彼女のスカートがひらめいて、ふわりと元の位置に落ち着いたところだった。

その瞬間に、白い太ももに対するホルスターが、似つかわしくなく巻かれていたのが見えた。

彼女の両手には二丁の短銃。

ガアアアア！

白い獣は銃声と光に驚いたのか、高々と後ろ足で立ち上がると、目を前足で擦る。

「今のうちよ！」

掛け声にセインはそのままラゾワをタックルよろしく引つ掛け、キヤルと共に扉へ走りこむと、後ろ手に扉を閉めた。

「うわ、生臭！」

セインに引つ掛けられながら、ラゾワが鼻を手で覆った。

「うわあ、右でも左でも一緒だったみたいだね？」

走って行くと、三叉路に出くわした。

片方を覗いてみればどうやら先程の左側の扉に繋がっているらしい。

「あんた本当に、どうやってここに来たのよ」

見上げるキヤルに、ラゾワは首を捻る。

「急いだほうがいいみたいだよ？」

走りながら後ろを振り返れば、暗闇の向こうから白いものがうっすら見える。閉めた扉はあっさりと破られたらしい。

「警戒してちよつと間を置いているけど、間違いなく追って来てる」

「うつつ、俺よく無事だったなあ！」

飛石が照らし出す範囲はせいぜい五メートルといったところか。

さすがに獣の通り道には壁画は描かれていない。

ひたつひたつひた

「やばい！」

身の軽い獣特有の足音が、背後から忍び寄ってきていた。

安全と決めたのか、サーベルタイガーが追って来ている距離を縮めたのは、間違いがない。

三人は走る速度を速めたが、それで野生の獣から逃げおおせるものではない。

距離はすぐに縮まった。

「セイン！」

キヤルの声と共にラゾワを伏せさせる。

ガウン！

一発の銃声。

ガア！ガアアア！

続けて獣の咆哮が上がる。

片目から血を吹き出し、白い猛獣は雄叫びを上げて数歩後退る。

「うわ、この暗いのによく当てる!」

「的がでかいからね!走って!」

再び、一斉に走り出した。

獣は前足で地面を引つ掻き、更に三人に向けて鋭い眼光を放った。
ウオオオオオオオ!!!

今までとは違う声は、明らかに怒りを表していた。

ガキン!

あっさり一跳びで追いつき鋭い爪を突き立てる。

「セイン!」

「僕はいいから、早く!」

ぎりぎり、自らの剣でその爪を受け止め、サーベルタイガーと力勝負に持ち込む。

「ちよつとラゾワ!どうやってここに入って来たのかくらい、さっさと思い出さないよ!」

「まままま、待て待て待て!」

キヤルに襟首を締め付けられながら、ラゾワは必死に記憶を辿る。
ガウ!

「!」

サーベルタイガーの牙が、セインの肩に食い込んだ。

「セイン!」

「そうだ!」

キヤルが叫ぶのと、ラゾワが叫ぶのとはほぼ同時だった。

「旦那!こつちだ!」

ラゾワが後方を指差す。

ドン!

キヤルが威嚇に銃を鳴らすと、サーベルタイガーが、びくりと力を緩めた。

その隙について、セインが力任せに獣を横薙ぎに払う。

その際、肩の肉をいくらか持っていていかれたが、それに躊躇している暇はなかった。

すぐに体勢を立て直したサーベルタイガーは、再びセインの肉を喰らおうと襲いかかって来る。

ドン！ドン！ドン！

ギャウウン

「しっつこいのよ！」

キアルの銃撃がサーベルタイガーに命中するが、全部が当たったわけではない上に、玉切れ寸前だ。

弾丸を込めている時間がない。

「こんなことならカートリッジ式のほうにしとくんだったわ」

舌打ちをしながらセインへ駆け寄り、彼を支えようとするが、なにぶん身長差があつて上手く出来ない。

「何やってんだよ、ほら！」

ラゾワがセインに肩を貸す。

「悪かったわね」

「こんな時こそ頼ってくれよ」

悪ぶれるキアルにラゾワがウイंकを返した。

「すまない・・・」

「いいって事よ」

素直に詫びるセインに、ラゾワは肩に手を回させながら笑いかけた。

暫く走ると、鉄の柵が見えた。

「ちょ、行き止まり?!」

驚くキアルに、ラゾワは笑ってみせる。

「違う、こつちだよ」

ラゾワが顎で示す先に、鉄の扉が見えた。

が、キアルには重くて押し開けられない。

グルルルル

そうこうしている間にも、獣の唸り声が迫ってきていた。

「ああ、くそ、持ってる！」

「きゃあ！」

セインをキャルへ放り投げると、ラゾワは自分のランタンを足元に置いて、鉄の扉に取り付いた。

二の腕の筋肉が盛り上がる。

ギギ、ギギギイイイ

錆び付いた嫌な音と共に、扉が押し開かれる。

自分の身体を捻り込んで大人が入れる大きさが確保できたか確認すると、ラゾワが手招きした。

「早く入れ！」

まず、キャルはカバンをラゾワに放り投げた。

次に、重いセインを引きずるように、彼女の身体が扉の中に入った時だった。

たん！

軽快な音と共に、白い影が躍った。

「きゃあああああ！」

「いけねえ！」

サーベルタイガーが、まだ扉の中に入りきらないセインの身体に押し掛かった。

とっさに、ラゾワはセインの剣を引っつかんで、サーベルタイガー目掛けて突きつける。

ガア！ガアアアアア！

怒れる獣は、その切っ先を払い落とそうとするが、ラゾワはそれに負けじと拳を突き出した。

どこん！

アップパーカットの要領で、サーベルタイガーの顎に、ラゾワの拳がめり込んだ。

がは！

さすがによろめいた獣に、ラゾワとキャル、二人がかりでセインの身体を扉の中へと引き込んだ。

ガアアア！

「うひゃあ！」

ドン！

キヤルが発砲した。

キユウ！キヤウウウ！

サーベルタイガーが数歩後退する。

「今よ！」

二人は懸命に扉を閉めた。

ガチャン！

閉まったと同時に、ドゴン！という鈍い衝撃が伝わった。

ドカン！ドゴン！

「体当たりしてやがる」

「ほんとにしつつこいわね！」

急いで鍵を閉めたが、それでも安心は出来なかった。

「セイン！」

「あ、ああ、ごめん。大丈夫だから」

そうは言うものの、彼の肩は引き裂かれ、身体のそこかしこに切り傷が出来ていた。

「立てるか？」

「まあ、ね」

ビリビリと、自分の着物の一部を割いて、包帯代わりに肩に巻きつける。

キヤルがそれを手伝うが、その間にも、布は血でじわりと滲んで行く。

「肉ごと持っていかれたからね。・・・参ったな」

切り傷のほうはなんでもないうだった。が、肩の傷はひどい有様だ。

「まあ、これで一安心だろ。来たときにや分からなかったが、多分ここが、あれを世話する奴が使ったための通路だったんだろうな」

辺りを飛石で照らし出してみれば、壁画とまでは行かないが、簡

素な装飾に色付けがされていた。

「多分、あの鉄の柵の奥に、まだいるんだろうね」

たった一頭で生き延びていたとは思えない。

それに、小さな国だったとはいえ、セインはこの国の存在を知らなかった。

使われている言葉は古代語。

いつから滅び、この生き物はいつからここで、命を繋げていたのか。

「あの柵の奥は、たぶん元々猛獣を飼っておくためのものだったんだろうさ。やあ、それにしたって俺、本当によく無事だったよな」

ラゾワは鳥肌の立つ両腕をさすった。

「というか、君があれを起こしてしまったんじゃないかな」

よろよろと立ち上がりながら、セインがつぶやいた。

「へ？」

「あの手の獣は耳と鼻が格段にいいからね。それに普段はあんまり身動きしないんじゃないかな。もともとサーベルタイガーは夜行性ではないからね。ここで生まれ育って進化したとも考えられるけど、多分、獲物の気配がしたときだけ、ああやって活動をする」

「なんだ、結局ラゾワが悪いんじゃない」

「お、俺が悪いのかよ？」

情けない顔をするラゾワに、セインは笑って答える。

「君が悪いわけじゃないよ。こうして逃げ場を思い出してくれたわけだし、それを言ったら、生き物をこんな地下に閉じ込めて、そのままにしてしまったこの国の人たちだろうね」

「そりゃ、そうだけだよ」

申し訳なさそうなラゾワに、セインは溜め息をつく。

「本当に、海賊だとは思えないくらいお人好しだね」

「あんたにだけは言われたくねえなあ」

さらに情けない顔になった。

「とにかく進むわよ。いろいろ調べ物もあるけど、一旦外に出てか

らだわ」

キヤルが飛石を引き寄せて、弾丸を込める姿を、ラゾワはセインに肩を貸しながら、まじまじと見つめた。

「？何よ」

「いや、お嬢ちゃんの武器は旦那だと思ってたからよ」

ラゾワに指を指されて、セインは不服そうだ。

「人を指差すものじゃないよ、ラゾワ」

「ああ、わりい」

そんな二人の会話にくすくす笑いながら、キヤルは器用に銃をくるくると回して、構えてみせた。

「悪いわね。私の本職はこっちな」

剣はセインと知り合ってから使うようになったと言って、キヤルが先を歩き出す。

「小さいからリーチで負けちゃうのよね」

「ああ、それなら拳銃なんかは関係ないしな」

合点がいったように、ラゾワが首を縦に振る。

それにしても射撃の腕前といい、出会ったときに垣間見せた剣技といい、大の大人顔負けだ。

剣に至っては、セインと出会ってからというなら、始めて三ヶ月そこそこということになる。

それであそこまで使いこなすのだから。

セインの教え方が上手いとしても、もう神業に近い。

「やつぱ末恐ろしいや」

もしかしくなくてもこの二人、最強のコンビじゃないだろうか。

出会ったときに見たキヤルの剣の腕前を思い出して、ラゾワは身震いした。

「うお？」

急に、セインを支えていた左肩が重くなった。

「う、ごめん。ラゾワ」

見ればずいぶんとセインの顔色が悪い。

「おいおい、大丈夫かよ？」

そろりと、セインを下ろして、壁にもたれかけさせる。
呼吸が荒い。

「剣でもやっぱ怪我すりゃ痛そうだな」

「当たり前でしょ！」

キヤルに食って掛かれ、ラゾワは思わず頭をかばった。

「大丈夫？セイン」

だが予想に反してキヤルの拳は飛んでこず、彼女はセインの側で心配そうに肩の傷を見ている。

「ラゾワ、ごめん。ちよつと迷惑をかけるよ？」

「へ？どういうこった。別にあんたくらい運ぶの、わけないぜ？」

「それは、頼もしい」

青ざめた顔でセインはそう言うと、目を瞑ってしまった。

すると、彼の体の陰影があやふやになり、すうつと、その姿を消してしまった。

残されたのは、先ほどまで杖代わりになっていたあの剣。

どうやら剣になった自分を運んでほしいということだったらしい。

「本当に剣なんだなあ」

「何を今更」

しみじみと、ランタンで照らしたセインロズドを眺めるラゾワに、キヤルが呆れたように言う。

「私じゃ引き摺っちゃって運べないのよ。あんたがいてくれて助かったわ」

「そりゃ、どうも」

剣のほう人間よりは運びやすいのでその点では助かるが、何せ抜き身。

「・・・聖剣ってんだから切れ味は？」

「抜群にいいわよ？」

「・・・そうかい」

どちらかというと、人間のままでいてくれたほうが良かったか、

などと思うが、こうして人に頼むぐらいなのだから、肩の傷は剣でいたほうが楽なのだろうか。

「しょうがねえ」

そう言くと、ラゾワは刃を外側に、峯を首に当てるといった格好で、肩にセインロズドを担いで、歩き出した。

先行きは不安定

「出口は思い出したの？」

キヤルが後をついて来る。

「んー、思い出したっつーか、まっすぐ来たんだから、まっすぐ行きゃいいはずだ」

「ああ、そう・・・」

脱力感に襲われるキヤルだった。

「だいたい、ラゾワはどういう所から入って来たのよ？」

「ええと、お前さんたちを下ろしたところから、島の西側へ歩いて探索してたんだが、途中で縦に裂けた穴を見つけて、そこから入ったんだよな。最初は自然の洞窟かと思っていたんだが、進んでみてびっくりよ。いきなり四角く掘り抜かれた空間に出たんだからな」
それなら、北東にあるカルド岬に出なくてもいいルートがあるということだ。

死体なんかとご対面しなくてもすむかもしれない、そう思っただけでキヤルは心底ほっとした。

「ねえ、キヤル」

「うわあ！」

いきなり耳元で声がして、ラゾワは危うくセインロズドを落としそうになった。

「な、なんだよセインの旦那、しゃべれんのかよ」

「あ。言ってなかったね。ごめん」

剣に話しかけるといふのは、妙な体験だ。

さすがは聖剣というべきか何と言つか。

「さっきから思ってたんだけど、この地下つてもしかしてさ、小さな町になってるんじゃないかな？」

地図を広げて、現在地を確認してみる。

さっきよりずいぶん西に反れたような気がする。

「ラゾワが洞窟を見つけたのはどの辺り？」

「・・・この辺かな？」

地図を見せれば、ラゾワが指し示した場所は、海賊船クイーン・フウエイル号とは、たいして離れていない場所だった。

それに、キヤルたちが落ちた場所から、カルド岬へ続く道と、ラゾワが辿って来た道の予想と、先程の闘技場を位置づける。

これだけでは分からなかったが、もし、島全体の地下に迷路のような通路が掘られていたとしたら。

「何がしかの娯楽施設だったかもね」

先程の闘技場がいい例だが、何故地下に潜る必要があったのか。

「遺跡には違いはないけど、これだけのものがあつて、港の人たちは気がついてなかったのかな」

「まあなあ。ただでさえ神聖な島にしちまつてるから、用がなけりや上陸もしねえだろうし」

こうやってよそ者の自分達が島に上がりこんでいるのだって、港の人々に知れたら快くは思われないのかもしれない。

「で、あんたたちはなんでこんなところに来てんだ？まさか俺たちみたいにお宝目当てってんじゃないやなさそうだし」

「・・・やつぱりギャンガルドの手下だわよね」

考えることが一緒だわ。

ぼやきながらキヤルは視線を逸らした。

「んだよ、それ」

「べつに？」

誘拐されたとき、船の中で、この島へ行きたがる理由を聞かれたのを思い出した。

ここにギャンガルドがいなくて良かったと思う。もしいたら、このままセインを持ち逃げされた可能性が高いと思われた。

それを考えれば、ラゾワのほうがお人好しすぎて、変な話、信用できるのかもしれない。

だからセインは自分の身を任せだし、キヤルはそれに文句を言わ

なかったのだが。

「で？俺の質問には答えてくれねえの？」

顔を覗きこまれて、キヤルはむうつと頬を膨らませた。

伝説の楽園エルドラド。

そんなものを探しているなんて知れたら、笑い飛ばされるに決まっている。

これでも馬鹿な探し物をしている自覚はあるのだ。

「私達が探してるのは、物じゃないもの」

ボソリと言った。

「物じゃない探し物？何だそりゃ？」

「だから、何だっていいでしょ」

キヤルの頬はますます膨らんでゆく。

「・・・怒るなよ」

「怒ってなんかいないわよ別に」

「言いたくなきゃ別に聞かねえけどよ」

「あらそう。助かるわ」

つれないキヤルの態度に、ラゾワはひょいっと、彼女の顔を覗きこんだ。

「！・・・っと、危ないわね！」

「ラゾワ？」

担いでいたセインをひょいと肩から外し、にんまりと笑う。

「やっぱ聞きてえな」

「はあ？」

かしちゃん、と、セインを壁に立てかけて、ランタンを床に置き、そのままどっかりと座り込んでしまった。

「ラ、ラゾワ？」

セインが訝しげに声を掛けるが、ラゾワはにこにこキヤルに笑いかけるばかりだ。

「あんたね……。何がしたいのよ、いったい？」

「へへへ。探し物が何か教えてくれるまで、セインの旦那を運ばないってのはどうだ？」

「ええ！？」

髭面の大人がすることではないうえに、あんまりにも子供っぽい発想に、セインもキヤルも、ある意味不意を突かれて驚いてしまった。

「……ラゾワがセインを運ばなくっても、私が運ぶから別にいいわよ」

キヤルがセインに手をかけて、よいしょとばかりに持ち上げる。

「キ、キヤル。カバンもあるのに僕もだなんて、無理だよ」

「うっさいわね。飛石とかに運んでもらうからいいのよ別に！」

「ていうか、ラゾワの目的って、飛石だよな？」

なら、飛石を渡さなければいいだけではないだろうか。

「ああ、そうか」

キヤルよりも先にラゾワが納得した。

飛石はキヤルとセインに反応する。

手招きをすれば側に寄ってくるし、追い払えば少し離れたところで静止する。

それを見て、ラゾワが二人に隠れてこっそりと手招きしてみたが、ふわふわと無視されてしまった。

「最初にインプットされたのが、僕とキヤルだからだろうね。鳥の雛の摺り込みみたいなものだよ」

セインの説明に、ラゾワは眉尻を思い切り下げて、がっくりとうなだれる。

「じゃあ、そいつを貰って帰っても、誰も扱えねえってことじゃねえか」

「いや。周期があつて、何日か経つと登録者をリセットしてしまうから、大丈夫だと思うよ。貴族や王族が使っていたものは大概その血族でなければ使えないようにしていたけど、これは一般用らしい

からね」

「そんなこともできんのか？」

「そうだね、作る職人にもよるようだったけど」

現在よりも八百年前の昔のほうが、文明が進んでいたのではなからうか。

「でも、必要がないといえれば必要がない機能だしね」

それにしても、たいした技術である。

ドン！

キヤルがいきなり発砲した。

「何だ？」

「シッ、黙って」

少女に言われて、口をつぐむ。

しかし、通路の奥は暗いばかりで、これといって変化がない。何があったか聞こうと、再び口を開こうとしたときだった。

「そこにいるのは誰？出て来なさいよ！」

キヤルが怒鳴った。

しかし、暗闇は暗闇のままで、何かが動く気配もない。

「・・・人ではないかもしれないわね」

「何だつて？また猛獣でも出てきたって言うのかよ!？」

舌打ちと共に呟かれたキヤルの言葉に、ラゾワは慌ててセインロズドを掴んだ。

「キヤル」

「分かってるわ」

セインの声に返事を返しながら、キヤルが飛石を連れて、つかつかと歩き出す。

「え？おい？お嬢ちゃん?!」

ラゾワが驚いてその後を追おうとすると、
げいん

「うお！」

妙な音と、妙な声が聞こえた。

「ほづら、やっぱり人間じゃなかったわ」

「そりゃないんじゃないかい？」

壁の影から顔を出したのは。

「キ、キャプテン！？」

「おう」

手を上げて答えるのは、どう見てもキャプテン・ギャンガルド。

その人だった。

「な、何でキャプテンがいるんです？」

「昼間に出かけたつつうのお前が夜なつても帰ってこねえから、何か見つけたんかと思って探しに来たんだよ」

「へ？もう夜なんで？」

どうやらラゾワは洞窟内に入り込んだせいで、時間の感覚がなくなっていたらしい。

その海賊二人から、徐々に距離を離す人影が二つ。

「化け物がいたわ、化け物が」

「さ、行こうか？キヤル」

気がつけばセインはいつの間にか姿を元に戻して、ラゾワの手の中は空っぽだった。

「化け物って、俺のことかよ？相変わらずひでえ扱いだなあ」

ギャンガルドは愛想良く笑顔を作って見せる。

この笑顔で、港町の女は一度にコロリと彼に惚れ込むに違いない、というような笑顔なのだが。

ラゾワのランタンを手に、二人の海賊を置いて、キヤルとセインはすたすたと行ってしまう。

「おおっい？」

「あ、ラゾワごめんありがと」

「その飛石はランタンのお礼代わりと言っちゃ何だけどあげるから気にせずもらっちゃって」

すちやつ、と、キヤルもセインも片手を上げて、一瞬こちらを振り向いたかと思えばそんなことを口早に残し、後はひたすら離れて行ってしまう。

ギャンガルドの笑顔光線は、この二人に効果はなかったらしい。

「こら」

すたすたすた

「こらこらこら！」

すたすたすたすたすた！

「待てって言っでんだろこら！」

「いいえ一言も言っでません。そもそも言われたところでイヤです」
「そうよ待ってたまるもんですか」

ギャンガルドが二人の後を追うが、一向に止まる気配がない。

「船に乗せてやったるうが！」

「誘拐したのはダレですか」

「言い訳にもなんないわね」

すたすたすた

「タカの飯は旨かったろうが！」

「あれはタカの腕がいいからよ」

「自分の部下だからって恩着せがましく言っのはまさに恩着せがましいよね」

すたたたた

「た、頼むから待ってくれ」

「嫌デス」

「まったくよ」

泣く子も黙る天下の海賊王も、この二人の前ではかたなしである。

「出口が分かるのかよ!?」

一瞬立ち止まろうとした二人だったが。

てくてくてく

「自分で見つけるし」

「壁に沿っていけば出れないなんてこともないだろうし」

また歩き出してしまふ。

「うわあ、キャプテンが相手に全くされてねえ・・・」

ぽかんと口を開けたままついて来てしまったが、滅多に見られない面白いものを見てしまった気がする。

「ラゾワ！」

「へい！」

「変な感想漏らすんじゃない」

ぼそつと呟かれた。

これは真剣に怒っているのかもしれない。

「あ、八つ当たりよ八つ当たり」

「イヤですね、大の男が八つ当たり」

「あつ、バツカお前ら！」

火に油を注ぐ二人を止めようと、慌てて走り出す。

「ふ、ふはははははは！」

だが、いきなりの大笑いに、ビクリと止まってしまった。

「ようし、楽しいじゃねえかこの野郎！」

殺気立つ声音で凄んでみたのだが。

「いっつも人をおちよくつておいて今更楽しいとか言われても」

「ねえ？」

二人の足はそれでも止まらなかった。

ギャンガルドの左の眉が、ピクピクと引き攣り、海賊王は、大きく深呼吸した。

「この先でちよつと変わったモン見つけたんだがな？」

なんだかヤケクソじみた言い方ではあったが。

ぴた

ようやく、キャルとセインの足は止まった。

海賊王の思惑

「何よ、変わったものって」

うるん気に、キヤルがギャンガルドを見上げる。

「俺には読めなかったんだが、どうやら古代文字っぽかったんでな。大賢者サンになら、読めるんじゃないかと思つてよ」

海賊王はにやりと、例の不敵な笑顔を張り付かせた。

「・・・あんたの目的ってそれじゃなかったの？」

キヤルが、ラゾワが抱え持つ、青く光る飛石を指さした。

「何だ??」

「あ、キャプテンこれ」

ラゾワが差し出す青い石に、ギャンガルドは目を輝かせた。

「浮石か!??」

「へい。その二人にもらったんですが」

ラゾワがキヤルたちを見やる。

「浮石じゃなくて飛石。まあ、どっちでもいいんだけどね」

セインが答える。

「もらったって、お前」

「ランタンと交換よ。私達、その石ランタン代わりに使ってただけだから」

今度はキヤルが答えた。

「ランタンとこいつじゃまるで価値が違うんだが、知ってんのか？」

「今はそんなことより、君の見つけたって言う、古代文字のほうに興味があるんだけど？」

「・・・怖えから、微笑まないでくれるか？」

につこり微笑むセインに、ギャンガルドもにつこり笑つてみる。

信用できないとばかりにセインもキヤルも、警戒心丸出した。

それを横から眺めるラゾワは生きた心地がしない。

先ほどまで調子を崩されていたとはいえ、今はけろりと二人の正

面に立つギャンガルドはさすがというのか。

「うう、ここにタカの野郎がいてくれたらなあ」

あいつなら、この場を上手く取り繕ってくれそうなのに。

気の良いコック長の顔を思い浮かべたら、一気に腹が減った。

ぐうぐうぐう

「あ」

体は正直だ。

「何今の」

セインが振り向いた。

「俺の腹の虫だ」

「威勢がいいね」

「・・・そうだな」

情けねえけどありがとう俺の腹の虫！

一斉に注目された自分の腹に、ラゾワは感謝した。

正直この三人のかもしれないし出す険悪ムードは勘弁してほしかった。身の置き場所がないどころか洞窟内で逃げ場所もない。

「よし」

ぼん、と、ギャンガルドが手を打った。

「とりあえず俺が見つけた部屋に行つて、飯だ」
うれしそうだ。

「飯つて、あんた手ぶらじゃない。どこにご飯があるのよ」

「それはその部屋へ行つてからの楽しみだ」

にんまりと笑う。

また例の、楽しんでいるあの顔だ。

キヤルはげっそりした。

が。部屋、という言葉も、古代文字、という言葉も気になるのは確かなので、仕方なくギャンガルドの後についていくことになった。

「・・・本当に仕方なさそうだな？」

「だって仕方ないもの」

その、ギャンガルドの言う部屋を自力で見つけるのも手だが、そ

れでいつまでたつてもここから出られなかったらシャレにならない。それに、セインの肩の傷も気になった。

ギャンガルドの手前、意地でも剣だけの姿になるわけにもいいかな。

先ほども今も、結構無理をしているのではないだろうか。

「セイン？」

見上げてみれば、心配ないよと、優しい笑顔が返ってくる。

一度剣の形をとったから、大分楽にはなっていると本人は言うのだが。

程なく。案外早くに、目的の場所にたどり着いた。

長い廊下の両脇は、同じような扉が並んでいて、まるでホテルを連想させる。

「ここだ」

着いた部屋は、回りの扉に比べて、結構頑丈そうな扉がついていた。

「……で？」

「でって？」

「ご飯は？」

「この中だ」

「……」

当たり前だろう的な返事に、キヤルはムツとする。

「あんた開けなさいよ」

「こっいつ男だ。」

絶対中に何かあるとみて間違いない。

「お？」

「お、じゃないわよ、一回この中開けてるんでしょ？」

「んー」

のらりくらりと、ぐずるギャンガルドに苛立ちが募る。

「……何よ」

「実は開けてないんだなこれが」

「はあ？」

では中にどうしてご飯があるなどというのか。

「あんだ、お弁当か何かタカに持たせられたんじゃないの？」

「持たせられた」

「この中に忘れて来たんじゃないの？」

「忘れたってゆうかなんと言うか」

忘れては来たのだ。

この扉の中に。

だが一度、閉めてしまつたらびくともしないのだという。

よくよく見れば、ドアノブに何か文字がびつしりと書かれている。目を凝らしてみれば古代文字のようだった。

だから、セインがいればなあ、と思つたのだが、会えるとも限らない。

仕方がないから暗闇に目が慣れた頃に、当初の目的どおりラゾワを捜し歩いていたらまたま自分達を見つけた、ということらしいかった。

「そういえば、ギャンガルド、ランタンとかランプとか、持つてなかったよね」

この真つ暗な中、それでよく歩き回つたものだ。

「いやあ、それもこの中に忘れちまつてよ」

ばつが悪そうなギャンガルドに、セインは溜め息をついた。

「ちよつとどいて？」

邪魔とばかりに海賊王を押しつけて、古代文字が書かれているというドアノブを解読にかかる。

「ええと……」

セインがぶつぶつと読み始め、すべて読み終わると、自然に扉はカチャリと音をたて、キイイ、と開いた。

「開け胡麻みたいだな」

「鍵みたいなものだからね」

感心そうなギャンガルドに、セインはちらりと疑わしげな目線を

送る。

「キミ、だいたい最初はどやってこの中に入ったのさ？」

「開いてたもんだから普通に？」

「へえ？」

最初から開いていたからつい中に入ってみた、とでもいうのか。

「そうだったとして、なんで忘れ物なんかしたのさ？」

弁当ならともかく、照明具まで。

「慌ててたからなあ」

そう言いながら、ギャンガルドはひよい、と部屋の中を覗いた。つられて、安全なのかと、残りの三人も中を覗く。

ふわりと、飛石が先に中に入った。

中は結構広い部屋だ。

ちよつとした調度品が置かれていて、ベッドまである。

しかしすべての家具が、華奢な彫刻を施されていたり、フリルの付いた小物が置かれていたり、ちよつと女性向きの趣がある。

宿泊施設のものにしては豪華ではあったが、何の変哲もない、といえば、何の変哲もないように見える。

壁の向こうの、大きな肖像画の女性が、きれいなドレスを着て、柔らかに微笑みかけていた。

「あ。弁当発見」

ラゾワが部屋の中心に置かれたサイドテーブルの上を指差した。

ギャンガルドが忘れていったのであろう、火の消えたランタンと、丁寧に包まれた小包が見えた。

「あ！馬鹿！」

コトリ、とラゾワが足を踏み入れた途端。

肖像画の女性がカツと目をむいた。

「へ？」

気付かずにラゾワは弁当とランタンを手にはしていたが。

ごうん、という音に反射的に身を屈めた。

チチチチチ！

「うおおおお？」

小さな黒い物体が、大きな集団となって飛び交い始める。

「ラゾワ！」

抜けそうになる腰を叱咤しながら、ラゾワは入り口へと這いずった。

「いていて、いて、いてて！」

それでも見る間に、ラゾワの身体は黒く覆われて見えなくなる。

「ち！」

ギャンガルドとセインが飛び出して、素手で黒い塊を掻き分け、ラゾワを引きずり出した。

その間にも、三人はあちこちを噛まれる羽目になった。

「キヤル！ランタンを！」

「今やってるわよ！」

セインに言われるより早く、キヤルはベッドのシーツを剥ぎ、鏡の前にあった青銅の大皿の上に、中の油をぶちまけて浸し、そこへ火をつけた。

チチチチチ！

辺りが炎に照らし出されると、小さな獣の大きな集団は、ばさばさと部屋から逃げ出し、通路の向こう側へと騒ぎながら消えていった。

「な、何だったんだ、今の？」

服のあちこちを噛み切られ、ところどころ傷を作って、ラゾワは呆然としていた。

「吸血蝙蝠ね」

「ご名答だ」

肩で息をしながら、ギャンガルドが言う。

「やっぱり油断がならないんだ」

セインはぶつくさと文句を言いながら、油を出してしまって、火が消えかかってしまっているラゾワのランタンの代わりに、ギャンガルドがこの部屋に忘れていった方のランタンに、火を移す。

景気よく燃える青銅の皿の上のシーツは、辺りを良く照らし出してくれている。

肖像画は最初に見たときのように、優しく微笑んでいる。

吸血蝙蝠がたまたま瞳のところにいて、目を見開いたかのように見えただけらしい。

「ああ、びつくりした」

「すまねえな、まさかお前さんが足を踏み出すとは思わなくてな」

「ひでえっすよ、キャプテン」

床に座り込んだラゾワに、ギャンガルドが笑いかける。

「まったく。部下を何だと思ってるのかって言う前に、私達を何だと思っているのかしらね?!」

「あー、それ、是非聞きたいなあ」

「いや、だから。………微笑むなつて。怖えから」

と、口では言うものの、ギャンガルドはどこ吹く風、といった態度だ。

「開いてたから入ったって言うのは本当だぜ? あれに襲われて部屋を出たときに、弁当とランタンを置きっぱなしにして閉めちまって戻ろうと思ったらもう開かねえ」

途方にくれても仕方がないから、とりあえずラゾワを探して通路を歩いていた、という、行動そのものが、確かにギャンガルドらしいといえbraしいのだが。

「無謀といえば無謀よね」

「んだよ、しつかり会えたんだからいいじゃねえか」

あきれ返るキヤルを尻目に、ギャンガルドが弁当の包みを開く。

「それは結果論でしょう。……ああ、もう。どうしたらこんなのが作れるのか今度聞いてみなくちゃね」

キヤルの目線はすでに、タカの弁当へと注がれている。

ラゾワに至っては、今にも飛びつかんばかりである。

話を聞くところによると。

「うへえ! 助かりますぜ! 何せ朝食っただけで、昼も夜も時間が分

からなくって食ってねえんです」

ということらしい。

「それにしても、一人二人分にしちゃ多いわね」

「おう。まあ、他の連中と、洞窟に入る前にはぐれたからな」

「・・・あんたの手下って、苦勞してそうだものね・・・」

その、はぐれたかわいそうな手下達の分は、キヤルとセインで頂けるのだから、まあ、良かったのかもしれないが。

弁当を食べ終わるまで、一同はとりあえずこの部屋で休息をとることにした。

「キヤル、眠いなら寝てもかまわないよ？ちようどベッドがあることだし」

「いいわ。寝ようにも寝られないもの」

セインがキヤルに睡眠をとることを勧めたが、寝ている間にセインを連れ去られそうな気がして、キヤルは心配で目が冴えてしまっていた。

「俺なら大丈夫だぜ？少しは信用しろよ」

「今さっきあんなことした奴が、よくもぬけぬけしゃあしゃあと、そういうことをほざくわね？」

キヤルの視線は、片時もギャンガルドから離れない。

こんな油断も隙もない奴の側に、自分達がいること自体が信じられない。

本当ならさっさとここで分かれて、自分達は自分達で違うルートを辿ればいいのか。

たえ出口がカルド岬であつたとしても、だ。

だがしかし、やはりセインの怪我が気になった。

「キヤル？僕のことなら気にしなくてもいいから」

「いいのよ、本当に眠気がおきないだけだから。あんたこそ、あたしのことは気にしなくてもいいわ？」

セインが気遣ってくれるのは嬉しいが、セインにしてもギャンガルドが信用できないから人の形をとったままにいることは、良く分

かっていた。

「さっきの吸血蝙蝠のことは謝るぜ？けどよ、吸血蝙蝠が中にいますって言ったら、開けてくれたかよ？」

「へえ？そこまでしてあんたは弁当が大事だったの」

弁当とランタンを取りに来るだけで、なんで騙されなきゃならぬのか。

「だって、腹が減るじゃねえか」

「……」

キヤルは殴りたい衝動をかううじて押さえ込んだ。

「のりくらりとこの男は！」

いつか絶対に仕留めて、役場に突き出そう、そうしよう。

それでもってその金で豪遊して、好きなもん買い漁って、好きなもん食いまくってやる！

心にそう誓う。

「それはそうと、キャプテン、これからどうしやす？」

腹が膨れて満足したらしいラゾワが、腹をさすりながら聞く。

「うん？目的のものは手に入っただし、この二人にはこの部屋へ来てもらっただし、後は外へ出るけど？」

「……ちよつとまった」

妙に引つかかる言い方をするギャンガルドに、キヤルは睨みを利かせた。

「この部屋に来てもらっただって、どういうことよ？」

「……そのまんまだが？」

ひく。

キヤルの頬が引きつる。

「もらっただって、いかにもな言い方よねえ？」

キヤルがぎろりと、ギャンガルドを睨みつけた。

「何？ギャンガルド。君、そういうもったいぶった言い方良くないよ？用があるなら言ってごらんよ」

二人のやり取りを見ていたセインが、まるで子供を諭すように言

うので、海賊王は言葉に詰まった。

見た目が自分より年上でも、三十路そここのギャングルドは、何百年も生きているセインから見れば、実は子供みたいなものだった。

「……………えつと？」

「うわあ、キャプテン子供みたいすね」

目が点になったままのギャングルドに、ラゾワが追い討ちをかける。

「お前は早く飯食っちまえ！」

「へーい」

おとなしくサンドイッチに手を伸ばすラゾワだが、キヤルとセインは依然、ギャングルドから視線を離さない。

「あー、別にまた騙そうってんじゃねえんだ。あんたらの探し物が何か、ずっと気になっててね」

「あ！それ俺も気になってやした！」

ラゾワの賛同を得て、ギャングルドは二人の視線を真っ向から受け止め、にやりと笑った。

例の、あの不敵な笑みだ。

「その笑顔、嫌いなよね」

「何でも知れたがるのは、悪い癖だよ？」

そのギャングルドの笑みを受け流して、セインもキヤルも、いかにも嫌そうだ。

「大体、私達が探し物してるなんて、あんたに言った覚えがないんだけど？」

腕組みをして、キヤルがキラリと睨みつける。

「俺も聞いた覚えがねえな？」

「なら、なんで自信満々なのよ」

「ああ、そりゃ、ほれ」

キヤルを攫ってきたときに、キヤルがギャングルドにこの島で何か見たか聞いたことがある。

「ああ、あれ？あれがどうかしたっていうの？」

「あんまり必死だったからさ、ちよつと気になったわけだ」

「・・・それでどうして探し物なのよ」

うさん臭そうに、キヤルは海賊王をねめつける。

「浮石のことかと思ったが、お嬢ちゃんは何物ではなくて、何か見たか、って俺に聞いただろ。ああ、こりゃあなんか、面白いなあ、と」

それにプラス、大賢者・セインロズドのご登場で、この宝剣にかかわる何かだろう、と検討をつけたらしい。

「具体的に言ったらセインは関係ないわね」

楽園なんてものが、武器であるセインとかかわりがあるわけはない。

探しているのはセインのためだが、大賢者セインロズド、という宝剣とかかわりがあるのかと言われれば、それは関係がないのだった。

「じゃあ、やつぱり探し物してるんだ？」

うれしそうなギャンガルドを、うろん気に見上げる。

「まあね。けど、本当に、あんたたちの興味をそそるようなご立派なお宝でもないし、お金にはならないし、触れることも出来ないものよ」

「なんだそりゃ。なぞなぞみてえだな」

「存在自体がなぞなぞみたいなものだもの」

すでに探し物があることは、ラゾワに話してしまったている。適当に言つて、適当にあきらめてもらおうと思つたのだが。

「キヤル。探し物、見つかったかも」

油断大敵

ギャンガルドとキヤルの攻防に、口出ししないで一点を見つめて
いるかと思いきや。

隣にいるキヤルに聞こえるか聞こえないかの小さな声だったとは
いえ、なんてことをこの場で呟くのか。

「あ、あんたね、もうちょっと時と場合を考えられないの?!」

「だからこうして小声で話してるんじゃないか!」

なにやら急に後ろを向いて、壁に向かってこそこそしだした二人
だ。

「んだよ?なんかあったのか?」

「「ちよつと黙ってなさい」」

二人同時に一喝されて、少々黙ってみることにする。

「キヤプテン、ほんとに子供みてえっすよ」

「んー、でもなあ。ブラッディローズと大賢者、同時に振り向かれ
て黙れと言われたら、黙るしかないだろう」

「そりゃそうっすけどね」

あくまでのほほんとしている自分の船長に、ラゾワは首をすくめ
る。

「で!ギャンガルド!」

「んあ!?!」

急に名前を呼ばれて驚く。

「僕らをこの部屋に連れて来たって、どういふことなのかさっさと
教えてくれないかな?!」

胸倉を掴まれんばかりの迫力に気圧されて、数歩後退した。

「ああ、それならもう気付いてんだろ?壁だよ」

「やっぱり!」

青銅の皿の上のシートは、蝙蝠を追いつつたときほどの勢いはな
いものの、セインの持つランタンと飛石とで、ちろちろと壁の文字

を浮き上がらせていた。

この部屋の壁にも、例に漏れず壁画が描かれている。

あの闘技場の通路と違って、居住区らしい場所に入ってから、通路の壁に壁画が描かれていたのだが、この部屋のものとはなんとなく雰囲気が違う。

絵は変わらず、この国の人々の日常を描いていたが、文字がまるで殴り書きでもされたかのような書き方だった。

「俺もさあ、不思議には思ったんだ。他の部屋は押しても引いても開かないってえのに、この部屋だけ、誘い込むように扉が開きっぱなしだったんだからな」

ではこれは、この部屋の住人が最後に書き残した文字だとも言うのだろうか。

「古代文字だろ？それ。俺は読めねえんだ。大賢者を連れてきたほうが早いかなと思ってな」

その割にはずいぶん勿体つけたものだ。

痛む肩に負担がかからないように壁にもたれ、セインは殴り書きの文字にランタンをかざす。

文字は壁画の上にもまで書かれており、やはり住人が書き残したものであるらしい。

「・・・・・・」

がつくりと、セインがうなだれた。

「な、何よどうしたの？また違ったの？」

「んー、ほら、この国、攻め滅ぼされたって言っただろ？それが、滅ぼされる前にシエルターを作ったんだよ、避難用にね。それがこの地下だったみたいだね」

「そ、そんなことが書かれてるわけ？」

「いや、内容的にはこう」

『このシエルターに辿り着いたなら、再び逃げよ。ここは知られた。約束の地で会おう』

「なにそれ？」

「だから、暫くは隠れて暮らしていられたんだろうさ。暇つぶしに闘技場を見物しに行くくらいはね。でも限界がある。植物は日の当たるところでなければ育たないし、家畜の世話だって大変だったろうさ。おそらくそれらは地上でひっそり行っていたんじゃないかな。それが、敵国に見つかってしまったて、ここまで攻めてこられた」

それで、書き置きをして逃げたのだ。

「でも約束の地って？」

「落ち合う場所を決めていたんじゃないかな。国が滅んでも、民族は生き残るわけだから」

セインはこの、「約束の地」という部分だけを読み、探し物が見つかったかと思ってしまうのだ。

「へえ？やっぱこんな古代文字でも読めるんだ」

いつの間にか、真後ろにギャンガルドが立っていた。

「古代文字つつつても、いろんな文体があるんだな。こんな殴り書きの、ミミズがのたくったような中でも、あんたにや読めるんだな？」

妙に感心するギャンガルドに、セインは変に危機を感じた。

「・・・君、やっぱりうさん臭いよ？」

セインが肩を押さえたまま見上げた。

「うん？そうか？そりゃ、俺がうさん臭いことを考えてるからじゃねえか？」

セインが手を合わせようと肩から手を離れたときだった。

その手をギャンガルドにがっしりと掴まれて、剣を出すのを阻まれる。

そのまま器用にくるくると細い鎖で両手を縛られ、瞬く間に担がれてしまった。

「ちょ、何！？」

「へへ、頂いてくぜ。なんならお嬢ちゃんもついて来いや」

あっさりと、長身のセインを軽々と肩に乗せて走り去るギャンガルドに、キヤルもラゾワもあっけにとられて一瞬の間、身動きが取

れなかった。

「セ、セイン!?」

慌ててキヤルは銃を構える。

ドドン!

「はっはっは! 当たらねえよ!」

ムカつく声が聞こえたが、実際ランタンも持たずに逃げ去るギヤ
ンガルドは、暗闇にまぎれてしまつてよく見えない。

「ちよつと! ラゾワ! これつてどういうことよ!」

隣で突つ立っていたラゾワの服の裾を引っばつて、無理やり屈ま
せた。

「お、俺だつてわかんねえよ! つてえか、俺置いてけぼり?!」

手下まで置いていつて、逃げてしまうなど、なんたることか。

キヤルは頭に血がどんどん昇つていった。

てっぺんから湯気が出そうだ。

「追うわよ! これ持つて!」

ばい、と自分のカバンをラゾワに放り投げ、飛石を呼び寄せて、
物凄い勢いでギヤンガルドの後を追いかけた。

「あんたよくあんなの手下やつてられるわね!」

「面目ねえ」

眉を吊り上げて走るキヤルは鬼気迫つて怖いものがあつた。

それに比べてラゾワは、もう情けないやら、何やらで、泣きそう
だつた。

「お、結構いいケツしてんじゃねえか」

「・・・男の尻触つて楽しい?」

追ってくる二人とは逆に、なんとものんきな会話である。

「なんでこんなことしたのさ!」

担がれて両手を括られ、抵抗らしい抵抗といえは足をばたつかせ
るくらいだが、屈強の海男には全く効果が上がらず、揺れるせいで
痛む肩をかばうことも出来ず、セインは声だけでも張り上げてみる。

「いやあ、実はお前さんに頼みたいことがあつてな？」

「頼み事だったらこんなことをする必要がないだろう!？」

「だって追われてみたほうが楽しくないか？」

「………君つて、君つて奴は!!!!!!」

怒りのあまり、このまま剣に姿を変えてやるうかと思う。

そうしたら刃でさつくりといくこと間違いなしだ。切れ味には自信があるし。

「……今物騒なこと考えたたる？」

「……よく分かったね？」

振動でどんどんずれていく眼鏡を、何とか直して前を見る。

担がれているから、セインの前方は今走つて来た方向になり、飛石の青い光でキヤルが追つてきているのがわかった。

もうすぐ射程距離に入る。

さすがに大人一人担いでの逃走は、足が鈍るらしい。

「追いつかれるのは時間の問題じゃないのかな？」

ちよつと、カマをかけてみる。

「んー、いいんじゃないか？」

「キヤルにどんな目に合わされるか、僕知らないよ？」

「あー、ゴールドンブラッディローズだからなあ。……うーん」

急に悩みだしたギャンガルドに、セインは思わず溜め息が出た。

「……今更後悔しても遅いんだけど？」

一応、年がら年中海の上にいるこの男の耳にも、キヤルの二つ名はよく入っているらしい。

狙った賞金首は逃がさない。

相手も自分も、たとえ血だらけになっても必ず仕留める金の髪の悪魔。

それで、いつの間にか付いた二つ名が、ゴールドンブラッディローズ。

「君はもう、今日の出来事だけで狙うに値するだろうから、標的にされるよきつと」

「妙なところで脅されても」

「あんまり知られてないことだけど、殺しはしないからその点は安心出来るよ?」

「妙なところで慰められても」

セインはきつと自分も殴られるだろうから、溜め息をつきつき、元凶のギャンガルドに出来るだけ精神的なお返しを試みる。

「お、見えてきた」

ギャンガルドの声に、無理やり後ろを見てみると、進行方向に薄青い光が見えた。

「あれ、出口?」

「そ。俺が入って来たな」

光に向かつて、ギャンガルドはどんどん突き進む。

ぱぱん!

という音が、今度はキヤルのほうから発せられ、音と共に光が跳ぶのが見えた。

チュイン!

近くの岩に、弾が掠った音が、耳元で弾けた。

キヤルの威嚇射撃だ。

「キヤル!」

呼びかけてみると、遠くから声が返ってくる。

「セイン! 無事?」

「僕なら大丈夫だから!」

担がれながらで説得力に欠けるが、とりあえず無事を伝えたい。「もう追いついて来たのか」

ギャンガルドが奥を振り返る。

「きゃぷてーん」

間抜けな声に、ギャンガルドは転びそうになった。

「ああ?!」

ラゾワが手を振っている。

「そっぴや君、ラゾワを置き去りにしたっけね」

「あー、ちよつとどうしようかと思つたんだけどなあ」

そもそも、ラゾワを探しにここへ来たのだろつに。ちよつとどうしようかと思つた、とは何事か。

本人が聞いたたら、さぞかし嘆くことだろつ。

「ま、いいか」

「え？」

軽く、ウキウキと楽しそうにギャンガルドが呟いたかと思えば。

ふつと、振動がなくなつて、変わりに下から圧迫感が迫る。

「ひえええ？」

実は担がれたまま落下していた。

一方、目の前に見えていた影が、不意に消えたことにキヤルは焦りの声を上げていた。

「きゃあ！消えた！」

「どうつこつた？」

急いで駆け寄つたが、足元が崩れる感触に反射的に後ろへ飛びのいた。

「な、何だ？」

キヤルの後ろにいたラゾワに、どんとぶつかつてしまつたが、キヤルはそれどころではない。

飛石に照らし出させると、足元に大きな穴が開いていた。

「反射神経いいな、嬢ちゃん」

中を覗くと、ギャンガルドが依然、セインを抱えたままこちらを見上げていた。

「返しなさいよ！セイン！」

「キヤル！」

声をかけると一生懸命こちらを振り向こうとしているのが見えて、ほつと息をつく。

肩の傷は一度剣になつたために、思つたほど酷くはないのだろつ

か、まだ大丈夫なようだ。

「今行くわ！」

高さはそれほどではない。飛石を使わなくても降りられそうだ。

「俺、どうしよう？」

前方の出口らしき光と、キヤルの顔を交互に見て、ラゾワがうろたえる。

「あんたは好きにしないさいよ。でもカバンは返して！」

キヤルから彼女のカバンをひったくるようにとられる。

「あ、嬢ちゃん！」

止める暇もなく、キヤルの小さな体は穴の中に吸い込まれてしま
う。

下を見れば、着地してすぐに立ち上がったキヤルが、鉄砲玉みた
いに走り出したところだった。

飛石の光もなくなつて、ランタンがあるとはいえ、急に暗くなつ
たように感じた。

「あー、とにかく、援護だ援護！」

ラゾワは出口に向かって走り出す。

「でも、どっちの援護だ？」

立場的に言えば明らかにギャンガルドの援護を呼ぶのが当たり前
なのだが、ラゾワはどちらとも決められずに、とにかく船へ一旦戻
ることだけを考えた。

隠されたもの 隠したものの

ドドドン！

「うひょお！」

迫り来るキヤルの弾丸を耳に、ギャンガードはそれでもセインを離さない。

担がれ続けて、セインもいよいよ疲れ果てていた。

肩は痛むし、男に尻は触られるし。

本気でセインロズドに姿を変えようかと考える。

「思ったんだけどよ」

「なんだよ」

「いかん。」

口調までやさぐれている。

「銃って反則じゃねえか？」

応えるのもうっとおしいと思ったら、変わりにキヤルが叫んだ。

「お生憎さまね！私の本業はこっちなよ！」

「うそーん？！ガンマンかよ？」

そんな会話が出るほど、三人の距離は縮まっていた。

「お！見えた！」

ギャンガードがそう叫んだかと思えば。

「ええ？！」

ぽーい、とばかり、セインは放り投げられていた。

「うわわわわっ！」

驚いた拍子に、思わずセインロズドに姿を変えた。

「セイン！」

「うひゃあ！」

からからと、床の上で滑りながら回転して、目が回りそうだ。走り寄ったキヤルに拾われて、何とか回転から免れたものの、ギャンガードが何を考えているのやら、さっぱり分からない。

おかげで両手を縛っていた鎖は解けたが。

「おお、よく回ったな」

「こらー！」

散々担がれて、痛い思いをさせられた拳句に放り投げるかこの男は。

叫んでみるが、たとえキヤルとはいえ、八歳の少女の胸に、しっかりと抱きとめられた姿では迫力に欠けた。

「セイン、これ・・・」

キヤルが呆然と辺りを見渡すので、剣の姿のままではあったが、セインもキヤルの視線を追ってみた。

「俺があんたを連れてきた理由、分かったかい？」

「・・・」

そこにあつたのは、ほの青く光を放つ石たちに囲まれた花の棺。透明な棺に蓋はなく、ただ花に埋もれて、そこに佇んでいる。

「・・・この人は？」

「きれいだろ？」

棺の中に横たわる、豊かな黒髪の女性は、今にも起きだしそうな息遣いが聞こえてきそうな、そんな風に見えた。

「なんだって、こんな所に？」

セインが震える声で呟いた。

「やっぱ、あんたの知り合いか」

「え？」

セインは、驚くキヤルの手から離れて、再び人の形をとった。

棺の前で、ひざまつき、そつと黒髪に触れる。

「知り合い、というのとは違うな。この子は、多分、彼女の子孫だろう。とても、よく似ているよ」

遠い昔にセインを愛し、信じきれなかった女性。

彼女の面影が残る面差しに、セインは声が震えた。

「・・・もしかして、君の奥さん？」

セインがギャンガルドを振り返る。

「よく分かったな？」

「だって書いてある。愛する海賊王に、永遠の愛と尊敬を」

「ああ、やっぱりそれ、古代文字か」

キヤルが、とてととと、セインの隣にやってくると、棺の中を覗き込む。

「・・・きれいな」

「自慢の嫁だったさ」

それが、殺された。

「俺が留守の間にな。航海に連れて行けばよかったと、今でも思うよ」

ギヤングルドが、初めて真剣な顔を見せた。

「君が僕をここへ連れてきた理由って、この棺に書かれた古代文字を、読んでほしくて？」

「おう。俺には読めねえんでな」

「・・・彼女と君はずいぶん仲が良かったようだね。君のことばかりだ」

「まあ、な。こいつにや、家族がなかったんでな」

「・・・そう」

読み始めるセインの声に耳を傾けるギヤングルドの姿は、とても寂しそうに見えた。

「大丈夫かい？」

「おっと、いけねえ。へへ」

こぼれそうな涙を、ギヤングルドは笑ってごまかした。

棺に刻まれていたのは彼女の遺言。

そして。

「このこと、君は知っていたんだ」

静かに、ゆっくりと、セインはギヤングルドを見やった。

「ああ、だから、あんたのことはすぐに分かった。話に聞いていたからな」

「それで、すんなり納得していたのか」

手の平から剣を出すのも、子供が聖剣を持っているのも。この海賊王は全て驚かずに見ていた。

「それとは別にしたって、喉から手が出ちまうくらいに、セインロズドは欲しいけどな」

権力や富なら、自分で手に入れる事が出来る。だから、千の知恵も万の力も、いらない。ただ楽しみたい、それだけで大賢者、聖剣セインロズドが欲しいのだと、ギャンガルドはそう言って、笑う。

こんな男と一緒にいたら、いくつあっても身はもたないと思うが、ギャンガルドの本心を隠さない、遠慮のない態度が、セインには気持ちよかった。セインはそんな彼に、仕方がないとばかりに笑い返して、彼の妻の棺へと視線を戻す。

遺言の一文として。

書き記されていたのは。

はるか昔に、愚かな一人の女が、恋人を信じることが出来なかったために犯した、罪の物語。

一族の女は延々とそれを語り継ぎ、だから一度信じた恋人は、何があっても信じ続けると、自分もそうしてきたことを誇りに思うと、彼女の遺言に刻まれていた。

「あんだだろ。剣になっちゃった、この男って」

「君は本当に行動が知れないけど、御礼を言わせてもらっよ。ありがとう」

その礼は、肯定を示す。

セインは立ち上がって、ギャンガルドに手を差し出した。

「俺も、これですっきりしたよ。何せこいつ、人目に触れたくないとかでこんなところに墓は作っちゃうし、一族の慣わしだかなんだかで古代語で遺言残すわで、俺も困ってたんだ」

照れくさそうに、ギャンガルドはセインの手を握った。

いまだに続く王族の血脈が、こんな風にあること事態おかしいとだ。

が、セインと王女の物語が刻まれているところを見ると、かの王女は、セインが剣になってしまったあと、追放されてしまったのかもしれない。

もしかしたら、元の恋人を想うあまり、自分で城を出たのかもしれない。

そう思ってしまうのは、己惚れだろうか？

「彼女も、辛かっただろうに」

改めて、棺の中の、女性の顔をみやる。

自分が、まだ王女の顔を覚えていたことに驚きながら。

「ねえ、一千万ゴールド」

「なんだ？そりや俺のことか？」

一千万ゴールドはギャンガルドに掛けられた賞金金額だ。

「嫌ならギャンギャンって呼ぶけど？」

「・・・どっちかつつたらそっちにしてくれ」

セインの隣にたたずんで、じつと棺を見ていたキヤルが、急に声を上げた。

この呼び方は、今までのギャンガルドの仕打ちに対する嫌味らしかった。

「この人が亡くなったのはいつ？」

「ああ。もう一月経つな。この石のおかげで、生きてるみてえに見えるけどよ」

棺の花の周りに置かれた青い石は、彼女の一族にまつわるものだという。

「けど、もういいやな」

ふわふわ浮かぶ飛石を捕まえて、棺の横に据えられた台の上に置くと、青い石は一斉に浮き上がって、光の粉になって砕け散った。

きらきらと輝いて、すうつと、消えてなくなってしまう。

あたりはまた、闇に閉ざされる。

「誰に殺されたか、分かっているの？」

「・・・名前まではわからねえ。が、見た奴の話じゃ、真っ黒いフードを目深にかぶった、左頬にでかい傷のある男らしい」

ことり、と、ギャンガルドが飛石を台座から外す。

「・・・見つけた」

飛石のおぼろげな光だけが浮かぶ闇の中に、キヤルのかすれた声が響いた。

「お嬢ちゃん？」

「あんたの奥さんを殺した奴は、あたしのパパとママも殺したの」
搾り出すような声音に、ギャンガルドは眉根を寄せた。

「キヤル、もしかして・・・？」

「そうよ。あたしが賞金稼ぎをする理由。それがその男よ」
キヤルはギャンガルドに飛びついた。

「奥さんが殺された場所はどこ！？」

その剣幕に、ギャンガルドは溜め息をついた。

「なあ、お嬢ちゃん。キャロット？なんでお前さんの両親を殺した奴が、こいつを殺した奴と同じだと分かるんだ？特徴が似ているだけかもしれねえだろ？」

「分かるわ！あんたの奥さん、服で隠してあるけど肩からばっさり切られてる。傷の方向からして後ろからよね。それで、このきれいな切り口。一緒なのよ！パパとママと！」

遺体を見て、きれいなと呟いたのは、肩口から覗いた傷跡を見てのことだったのかと、セインは驚愕した。

「そして左頬の傷！口元から目尻にかけてのものはずよ。あたしが付けた傷だもの。間違えようがないわ！」

掴み掛かるキヤルに首を振り、ギャンガルドは背を向けて歩き出す。

「とにかく、ここを出ようぜ。悪いが、そんな話をこいつの前でしたくねえ」

はっとしたキヤルは、スカートの裾をぎゅっと掴んで俯いた。

「ごめんなさい」

小さく呟いた言葉に、ギヤンガルドはかすかに振り向いて笑った。

和合すれども暇は無し

外へ出ると、クイーン・フウエイル号一同が、勢ぞろいで待っていた。

日は昇って燦々と光を降り注ぎ、とうに朝が来ていたことを伝え、洞窟内とは打って変わって、さわやかな空気が肺を満たす。

肩にロープを担いでいたり、救急箱を抱えていたり、縄梯子を運んでいたりと、面々の、大そうな救助道具にギャンガルドは笑い、ラゾワは三人の顔を見て腰が抜けたようにしゃがみこみ、タカはキヤルに泣きついた。

あの、洞窟内での別れ際の騒動に、ラゾワは心底心配したらしい。船の乗組員全員かき集めて、援護ではなく、救助を求めたのだ。

「大げさだよまったく」

笑いがおさまらないギャンガルドに、ラゾワが食ってかかった。

「だってキャプテン、あれじゃあ間違いなくキャプテンが悪者ですって！」

怪我人に鎖を巻いてそのまま連れ去り、本来の目的だった、探していたはずの部下は置き去りにし。

「キャプテンのことだから、絶対楽しんでるだけだって自信はあったすけど、相手が相手だし！お嬢なんか、まだぜんぜん子供なんスヨ？！」

興奮しすぎて語尾が裏返っている。

「ああ、わかったわかった、俺が悪かったよ」

降参のポーズをとるギャンガルドに、ラゾワの次はタカが食って掛かる。

「まったく、弁当食いそびれたってみんなから苦情が来るし、その分また飯作んなきゃいけなかったし！キャプテンももう少し自重してくれねえと！」

「うー、俺お前にまで怒られるの？」

情けなくも眉尻を下げるギャンガルドに、タカは額を押さえて唸った。

「うつわ自覚ないんだ！キャプテン今日の昼飯抜き！」

「げ！」

もみくちやである。

「あの、みんな。もうそれくらいにしてやってくれないかな？」

おそろおそろ、セインが口を挟んでみる。

確かにはちやめちやだったが、ギャンガルドにも、部下に知られたくない秘密があったわけで。

結局は、その手伝いをさせられただけだったのだから、今となつては、セインはそんなに怒ってはいなかった。

だからといって、ギャンガルドを信用したわけでもないが。

「旦那！あんな目に合つておいて、うう、申し訳ねえ！」

「肩の傷は大丈夫かよ？」

わらわらと囲まれた。

「ああ、もう大分傷は楽だから、気にしないで。それより、タカ、君のお弁当、僕らも食べたんだ。食いはぐれた人がいるって、ごめんね？」

「その謙虚さをキャプテンに分けられたらなあ！」

「違いねえ！分けれるモンなら分けてくれねえか？！」

「む、無理だよ」

思わぬ再会がうれしかったのだろう、我も我もと集まるものだから、背の高いセインが埋もれるほどだ。

「お嬢も大変だったなあ」

セインと並んでいたキヤルも、必然と囲まれて、小さな彼女は早々に埋まつてしまっていた。

「・・・どつちかつていうと、今のほうが大変だわ」

埋もれるだけ埋まつて、キヤルがぼそりと呟いた。

心なしか元気の無いキヤルに、タカは景気付けだとはかりに朝食を差し出した。

「腹が減ってんじゃないかねえかと思ってな。ちゃんとしたのは船に着いたら食わしてやるから、まずこれ食べな！」

元気がないときは食うに限る、とはタカの持論なのだが、人間、腹が減っていては思考も偏る。

バスケットの蓋を開けたとたんに、キヤルの目が輝いた。

その様子を見ていた一人が、

「なんだ、お嬢もゲンキンだな！」

と言ったものだから、どっと笑いがあふれた。

その様子に、セインはほっと安堵の息を漏らす。

「おめえも苦労してんなあ」

「いや、僕もキヤルには助けられっぱなしですから」

目を細めてキヤルを見つめるセインに、ギャンガルドが、今度は溜め息をつく。

「な、何ですか？」

この二人は、自分達の気持ちに気がついていないのか。特にセインに至っては、キヤルの言うとおり、年を食いすぎてボケてしまっているのだろうか。

「それにしても、すんげえ年の差だな？」

にやりとそんなことを言うギャンガルドに、セインは何のことだか分からなくて、首を傾げる。

「さつきから、いったい何のことですか？」

「いんや？ 気にすんな。それより」

そんなセインの視線を一回かわし、もう一度、今度はずっと顔を近づけた。

「俺のカミさんのことについては、黙っといってくれてありがとうよにかつと笑う。

話を上手く逸らされたような気もするが、セインもにつこりと、微笑んで返した。

「いえ、あなたも、大変でしたでしょうに、キヤルのことまで気遣っていただいて」

「・・・」

「なんです？」

自分の顔をまじまじと見つめながら固まるギャングルドに、セインは訝しげに眉をひそめた。

「いや、怖くない微笑もできるんだなあ、と」

「・・・あなた、僕をなんだと思ってるんです」

「できれば今からでもかつ攫っちみたいくらい欲しい大賢者」

即答で、けろりと返される。

「・・・あ、そうですか」

冗談なのか本気なのかといえば、彼のことなので本気なだろう。

無理だとわかってるから手を出さないだけで。

やっぱりギャングルドは苦手だと、セインは思う。

人生を常に面白おかしく謳歌しようという心意気は認めるが、人を巻き込むのは是非止めていただきたいものだ。

しかし、苦手といっても聞いておかなければならないことがある。ふう、と一呼吸して、セインは海賊王の目を見た。

「あの。あなたの奥さんですが・・・」

聞きにくいことだが、確認を取らねばなるまい。

キヤルのためにも。

セインは声を小さくしてギャングルドに訪ねた。

「ああ、多分、お嬢の言う男に、殺されたと見て間違いないだろう」

何故殺されたかといえば、多分に海賊王の伴侶だったからだろう。

「どうしようもない怒りだな。この感情は」

いつもの飄々とした表情は消えうせ、彼の瞳に、暗い光が宿る。

「復讐しようとは・・・？」

「・・・思うが、だからといってあいつが帰ってくるわけでもねえ。旅先で、もしその男に会うことがあったら、迷わずに切り捨てるだろうがな」

静かに語るギャングルドの目には、先ほどまでとは違った、炎のような光が揺らめいていた。

「お嬢ちゃんの気持ちも分かる。経験者だからな。だからといってあんなちっせえ体に、んなくだらねえ重荷を背負わせることもないだろ」

今度はにやりと、例のあの笑顔で、白い歯を見せる海賊王に、セインはまた笑った。

「本当に、掴み所がありませんね。あなたは」

「かつこイイだろ？」

「さあ、それはどうでしょう？」

笑いあう二人に、ラゾワがびしつと指を刺す。

「ああ！何を二人で楽しそうにしてるんすか！」

「だからラゾワ。君、人を指で指すのは良くないって」

そんなやり取りをしているところに。

「うわあ、やな鳴き声聞いちゃった」

キヤルが青ざめた声を出した。

「キヤル、それってもしかして・・・？」

セインの顔も青ざめた。

「もしかなくっても、そのもしかしてよ！」

わけの分らない二人の会話に、海賊達が首を傾げたときだった。

クエエエエエエエエエ！

「来たー！」

三つ足の巨大な怪鳥が、何故か朝日を背中にしよって現れた。

「何だありゃ？」

のんきなギャンガルドに、キヤルが叫ぶ。

「ロックバードよ見て分かるでしょう！？」

「いや、普通は分からないと思うよ？」

冷静にツツコミながら、セインは走る。

「どわああああ！」

見たこともない伝説の巨大な鳥に、海賊達は色めき立った。

ケエエエエエエ！

また鳴き声がすさまじい。

「うへえ！なんだあ？ありゃ」

「うわうわうわ！」

急降下で襲ってくるのを、一斉に転げるように地に伏せてやり過ぐす。

「ああ！俺の髪！」

「禿げた！」

「タカの仲間入りはごめんだ！」

「あんだとコラ！飯抜かすぞ！」

何人かが、頭を大きな爪に掠められて、髪の毛を剃られた。

「とにかく、撤退！」

穏やかだった空気は一転。

全員がクイーン・フウェイル号へと走り出した。

楽園へ続く道

「あー、いろんなことがあってすっかり忘れてたわね」

とにかく何とか無事に島を離れてから、ぴたりとロックバードの襲撃は止み、やっとのことで、切れた息を整えた一行は、一気に脱力感に襲われた。

「そーいや、ロックバードがいるって、旦那もお嬢も言ってたっけな」

ラゾワがぼそりとそんなことを言ったので、仲間達から、そういうことは早く言えだの、なんで忘れてるんだだの、ぼこぼこ頭を殴られている。

「日が昇ったから、出てきたんだねえ」

ずれた眼鏡を直して、太陽て手をかざすセインに、わけが解らないというように、水をいっぱい飲み干してから、ギャンガルドが食ってかかった。

「昨日はいなかったぞ？」

「あ、それ多分、僕らを襲ったからじゃないかなあ？」

もう疲れた、というように、船の縁にのしかかってだらしく伸びるセインに、ギャンガルドは息をつきながらナルホドと納得した。

「あれ？何度かこの島を訪れているんじゃないの？君」

「今までだって来てるが、あんなのはいなかったぞ」

それは運がいいというべきか。

「あー、もしかして、一人で来てたでしょ？」

「！よく分かったな。こっそり小船なんかで、こーう、そそそっと奥さんのことを秘密にしていたなら、近くを通った時なんかには一人で訪れていたに違いない。」

「だからだよ。小船だから、ロックバードも餌を運んでくる町の人たちと同じに見てたんだ」

「って、それってえつと？」

引きつった笑みを浮かべるギャンガルドを、呆れ顔で見つめ返す。
「ここの人たちが、あの島で鳥葬をしているのは知っているよね？」
「あー、やっぱりか」

聖域になっているこの島を訪れるのは、亡くなった人を運んでくる小船くらいのもものだろうから、ギャンガルドが小船で訪れても、ロックバードは餌を運んできた町人くらいにしか思わなかったのだろう。だから襲ってこなかったのだ。

「なんか、餌ってな・・・」

「ロックバードにとっては、人の亡骸も餌ってことだよ。町の人はどう崇めていようとね」

「まあ、それで食べてもらって、天国へ行けるのなら、文句もないだろうしな」

物騒な会話を、海に向かってしていれば、タカが二人の間に割って入った。

「何気持ちの悪い話してるんスか」

「やあ、タカ。君のお弁当箱、あの島に置いて来ちゃったよ」

再びの怪鳥の登場で、キヤルのカバンを死守するので手一杯だった。何せあのカバンがなくなってしまったら、キヤルもセインも商売上がったりで路頭に迷う事この上ない。おまけにキヤルに殴られるに決まっているのだ。

旅の不便なところは、大事なものまで一緒に持ち歩かなければならないことだ。

例えば身分証明にもなるキヤルのハンターパスとか、商売道具（いわゆる各種銃火器）やら通帳やら財布やら。

おまけにキヤルの着替えからお気に入り的小物まで。ぎっしりと詰まっているので、小さな車輪が付いているとはいえ結構な重さなのだ。

「今は僕が持ち運んでるけど、前はキヤル一人で持ち歩いてたんだよな」

キヤルって凄いなあ、などと、今更ながら変なところで感心して

しまうセインだった。

「そんなことより、お嬢も旦那も、もちろんフウエイルで陸まで行くんだろ？」

そうだった。島に上陸したときにもらったボートは、あの騒動で島に置いてきてしまったままだ。

「ごめん、ギャンガルド」

「うへ、素直にあやまんなよ。鳥肌立つちまう」

「そうですよ旦那。あんなくらしいの船だったら、俺たち自分で作っちゃまうから気にすることはねえ」

どうやらクイーン・フウエイルに備えてある小船は、全て乗組員が暇つぶしに作ったものらしい。

「へえ！凄いなだね」

「そんなことねえよ」

驚くセインに、タカは照れて禿げ頭を掻く。

「まあ、そういうことだから、船のことは気にすんな」

「そうよセイン。乗せて行って貰わなきゃ、陸まで帰れないんだから」

セインの脇から、キヤルが顔を出して、三人の男の間に遠慮なくぐいぐいと入る。

「でもキヤル、小船をなくしてしまったのは事実だし」

「タカが気にするなって言ってくれたわ。それに、誘拐されたり拉致されたり監禁されたり脅されたり弄ばされたりした代償としては安いくらいよ」

鼻息も荒く、金髪の少女はふんぞり返る。

「うわあ、思いつきり変質者な犯罪者みたいっすね、キャプテン」
罪名がいちいち怪しいのはどうしたものか。

「まぜつかえすんじゃないやねえ！抵抗できねえだろうが！」

「いひゃいっしゅ、ひゃふひえん」

つねって伸ばされて、両頬がびろんと伸びたままタカがしゃべるので、変な単語になる。どうやら、痛いっす、キャプテン、とか言

っているらしい。

ともあれ、セインとキヤル、ギャンガルド一行は、再びクイーン・フウエイル号に乗って、短い間だが、航海を共にすることになった。相変わらず、ギャンガルドは信用されていないようで、セインもキヤルも、彼だけには警戒心むき出しだった。

その間、セインたちの地図と、海図をラゾワが見比べて、島の灯台もどきは当時のあの国の人たちに逃げ道を指し示すものであったことも判明したりと、ちょっとした発見もあったりした。

また、船の上ではあだ名で呼び合うものだと言いが言い始め、セインの呼び名は大賢者にあやかっ、グランローヴァから、グラン（本人はお爺さんみたいだからやめてくれと最後まで抵抗した）となり、キヤルは二つ名からとって、ローズ（なんだかサスペンス小説ですぐに死んじゃう水商売の女みたいだからやっぱりやめてと本人は抵抗気味）と、勝手に呼び名を決められた。

しかし、ラゾワの本名がラルクント・ラゾッドだったのはまだいいが、タカの本名がキースウェル・ハートだったことには納得がいかないキヤルだった。

これであんたらクイーン・フウエイルの乗組員だと言われたのは素直にうれしかったが。

でも結局、呼びなれてしまったのは”旦那”と”お嬢”だったのだ、そう呼ばれることの方が多くて、安心した二人だった。

ギャンガルドを除く海賊達と、そんな妙な親睦まで深めて、二人は次の港町で船を下りた。

最後に、ギャンガルドがもう一度セインとキヤルを誘ったが、それはやっぱり無下に断られて終わったりした。

大勢と過ごした時間は短かったが楽しく、キヤルが両親を殺した男のことを口にしなくなっていたことに、セインは内心ほっとしていた。

賑やかな海の生活と、珍しい魚やタカのつくる美味しい料理など

で、気をそらせてくれたならそれでいい。ひと時でも、キヤルに楽しい時間を提供してくれたクイーン・フウェイルの皆に、セインは心から感謝した。

このまま忘れていてくれればいいと思うが、彼女が賞金稼ぎを続ける限り、それはありえないのだろう。

次に訪れた宿屋は、海の見える高台にあった。

窓から、港に浮かぶ帆船が見える。

目を細めて懐かしそうに海を眺めていたセインが、ふと、視線を室内に戻した。

「ああ、そうだ。キヤル」

「何？」

別れ際。

ギャンガルドがセインに言った言葉を、今思い出したのだ。それをキヤルに耳打ちする。

二人でくすくす笑いあった。

「まったく、本当に油断も隙もないんだから」

「まさか、すっかりバレているとは思わなかったよねえ？」

船を降りるセインを呼び止めて、にやりと笑ってギャンガルドが言った言葉。

『早くお嬢と一緒にあって、気兼ねなく平和に暮らせる楽園なんかが見つかるといいな？』

一緒になって、というところに、もしかして結婚、という意味が込められているのだろうか？とセインは思いつつ、何でもお見通しの海賊王が、ああ見えて実はお節焼きなことに、二人で笑いあった。

「さて、次はどこへ行きましょうか？」

「そうだねえ？」

今度は、二人一緒に買って来た地図を広げ、頭をつき合わせてお茶をすすった。

セインの淹れたお茶はやっぱおいしい。

キヤルが、窓から差し込むオレンジ色の光に、目を眇めて外を見やる。

今日の夕焼けはきれいだから、明日はきっと良い天気になるだろう。

「あ、そうそう。あのエルグランド島の獣達ね。ギヤンガルドが開放したらしいよ？奥さんの墓を守らせるんだって」

「げ。じゃあ、あの島、今天然サファリパークなわけ？」

「街の人たちどうするんだろうねえ？」

「……まあ、いいけど？」

ちよつとしたオマケもついたが、海賊のおかげで、なんだかエルドラドに近づいたような気がした。

楽園へ続く道（後書き）

これで一応一括り終了です。

文庫本一冊分、お付き合いいただきましてありがとうございました。素人が書いたもので、最後まで読んでくださった方には本当に、拙くて申し訳ないです。それでも自分では楽しんで書き上げることができましたが、ど、どうでしょう？感想をいただけると本当にうれしいです。

要望が、思ったよりもいただけましたので、続編を執筆することになりました。<http://ncode.syosetu.com/n7713a/>で続編へ飛ぶことができます。こちらもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896a/>

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！

2010年10月8日13時23分発行